

すみだ川

永井荷風

青空文庫

俳諧師はいかいし 松風庵しょうふうあん蘿月らげつ は今戸いまどで常磐津ときわづの師匠ししようをしてじついる実
 の妹をば今年ことしは孟蘭盆うらぼんにもたずねずねずにしまつたので毎日まいにちその事ことの
 み氣いきにしている。しかし日盛ひざかりの暑あつさにはさすがに家うちを出でかねて
 夕方ゆふぐれになるのを待つ。夕方ゆふぐれになると竹垣たけがきに朝顔あさがおのからんだ勝手口かたてぐち
 で行ぎようずい水みづをつかつた後のちそのまま真裸まっぱだか体かで晚酌ばんしやくを傾かたけやつとの
 事膳ぜんを離はなれると、夏なつの黄昏たそがれも家々いえいえで焚たく蚊遣かやりの烟けむりと共にいつか
 夜よとなり、盆裁ぼんさいを並ならべた窓まどの外の往來わうらいには簾すだれ越こしに下駄げだの音ね
 職人しよくにんの鼻唄はなうた人の話声わなしこゑがにぎやかに聞え出す。蘿月らげつは女房にようぼうの

お滝たきに注意されてすぐにも今戸へ行くつもりで格子戸こうしどを出るのであるが、その辺へんの涼すずみだい台だいから声をかけられるがまま腰おろを下すと、一杯いっぱい機嫌いきげんの話はなし好きずきに、毎晩まいばんきまつて埒らちもなく話し込んでしまふのであつた。

朝夕がいくらか涼しく楽になつたかと思つたと共に大変日ひが短くなつて来た。朝顔の花が日ごとに小さくなり、西日が燃える焰えんのように狭い家いえ中ちゆうへ差込んで来る時分じぶんになると鳴きしきる蝉せみの声こゑが一ひと際とき耳みみ立たつて急せわしく聞える。八月もいつか半過なかばぎてしまつたのである。家の後うしろの玉蜀黍とうもろこしの畠はたけに吹き渡る風の響ひびきが夜などは折おり々り雨あやかと誤あやまれた。蘿月なごりは若い時分かわりめしたい放題ふしづし身みを持もち崩くずした道楽なごりの名残なごりとして時候かわりめの変目かわりめといえは今だに骨ほねの節ふしづし々りが痛いたむ

ので、いつも人より先に秋の立つのを知るのである。秋になつたと
 思うと唯ただわけもなく気がせわしくなる。

蘿月にわかは俄うろたに狼狽え出し、八日ようか頃の夕月がまだ真白く夕焼の空
 にかかつている頃から小梅こめ瓦町かわらまちの住居すまいを後あとにテクテク今戸を
 さして歩いて行つた。

堀割ほりわりづたいに曳舟ひきふね通どおりから直ぐさま左へまがると、土地の
 ものでなければ行ゆく先の分らないほど迂回うかいした小径こみちが三囲みめぐり稻荷いなり
 の横手を巡めぐつて土手へと通じている。小径こみちに沿うては田圃たんぼを埋立うめた
 てた空地あきちに、新しい貸長屋かしながやがまだ空家あきやのままに立並たちならんだ処も
 ある。広々した構えの外には大きな庭石を据並すえならべた植木屋もある
 れば、いかにも田舎いなからしい茅葺かやぶきの人家のまばらに立ちつづいて

いる処もある。それらの家の竹垣の間からは夕月に行水をつかっている女の姿の見える事もあった。蘿月宗匠はいくら年をとつても昔の氣質は変らないので見て見ぬように窺と立止るが、大概はぞつとしない女房ばかりなので、落胆したようにそのまま歩調を早める。そして売地や貸家の札を見て過る度々、何ともつかずその胸算用をしながら自分も懐手で大儲がして見たいと思う。しかしまた田圃づたいに歩いて行く中水田のところどころに蓮の花の見事に咲き乱れたさまを眺め青々した稲の葉に夕風のそよぐ響をきけば、さすがは宗匠だけに、銭勘定の事よりも記憶に散在している古人の句をば実に巧いものだとおもいかえ思返すのであった。

土手へ上つた時には葉桜のかげは早や小暗く水を隔てた人家には灯が見えた。吹きはらう河風に桜の病葉がはらはら散る。

蘿月は休まず歩きつづけた暑さにほつと息をつき、ひろげた胸をば扇子であおいだが、まだ店をしまわずにいる休茶屋を見付け

て慌忙で立寄り、「おかみさん、冷で一杯。」と腰を下した。正

面に待乳山を見渡す隅田川には夕風を孕んだ帆かけ船が頻り

に動いて行く。水の面の黄昏れるにつれて鷗の羽の色が際立つて

白く見える。宗匠はこの景色を見ると時候はちがうけれど酒なく

て何の己れが桜かなと急に一杯傾けたくなくなったのである。

休茶屋の女房が縁の厚い底の上つたコップについて出す冷

酒を、蘿月はぐいと飲干してそのまま竹屋の渡船に乗った。

丁度河の中ほどへ来た頃から舟のゆれるにつれて冷酒がおいおいにきいて来る。葉桜の上に輝きそめた夕月の光がいかに涼しい。滑なめらかな満潮の水は「お前どこ行く」と流行はやりうた唄にもあるようにいかにも投遣なげやつた風ふうに心持よく流れている。宗匠は目をつぶつて独ひとりで鼻唄をうたつた。

向河岸むこうがしへつくと急に思出して近所の菓子屋を探して土産みやげを買いまどばし今戸橋を渡つて真直まっすぐな道をば自分ばかりは足許あしもとのたしかなつもりで、実は大分ふらふらしながら歩いて行つた。

そこ此処ここに二、三軒今戸焼いまどやきを売る店にわずかな特徴を見るばかり、何処いずこの場末にもよくあるような低い人家つづきの横町よこちようである。人家の軒下や路地口ろじぐちには話しながら涼んでいる人の浴衣ゆかた

が薄暗い軒燈けんとうの光に際立きわだつて白く見えながら、あたりは一体にひっそりして何処どこかで犬の吠ほえる声と赤児あかごのなく声が聞える。天あまの川がわの澄渡すみわたった空に繁しげった木立を聳そびかしている今戸いまど八幡はちまんの前まで来ると、蘿月まは間もなく並んだ軒燈の間に常磐津文字豊とよと勘かんんていりゆう亭流ていりゆうで書いた妹の家の灯ひを認めた。家の前の往来には人が二、三人も立止なつて内なかなる稽古けいこの浄瑠璃じようるりを聞いていた。

折々恐おそしい音ねして鼠ねずみの走る天井からホヤの曇ろくぶしんつた六分心のランプがところどころ宝丹ほうたんの広告や『都新聞みやこしんぶん』の新年附録の美人画みやびがなどで破やぶれ目をかくした襖ふすまを始め、飴色あめいろに古びた箏筒たんす、雨漏あまもりのあとのある古びた壁かべなど、八畳の座敷ざしき一体をいかにも薄

暗く照てらしている。古ぼけた葭戸よしどを立てた縁側そとの外には小庭こにわがある
 のやらないのやら分らぬほどな闇やみの中に軒の風鈴ふうりんが淋さびしく鳴り
 虫むしが静しずかに鳴いている。師匠ししやうのお豊とよは縁日えんじつものの植木鉢うゑきばちを並べ、不
 動尊どうそんの掛物かかものをかけた床とこの間まを後にしてべったり坐すわつた膝ひざの上に
 三味線しやみせんをかかえ、檜かしの撥ぼちで時々前髪まへかみのあたりをかきながら、掛
 声をかけては弾くと、稽古本けいこぼんを広げた桐きりの小机こなたを中ちゆうにして此方
 には三十前後の商人しやうじんらしい男おとこが中ちゆう音おんで、「そりや何をいはし
 やんす、今さら兄いもうとと妹いもうとといふにいはいはれぬ恋こい中なかは……。」と「小
 稲半兵衛いなはんべえ」の道行みちゆきを語る。

蘿月らげつは稽古けいこのすむまで縁えん近くちかに坐すわつて、扇子せんすをぱちくりさせ
 ながら、まだ冷酒ひやざけのすつかり醒さめきらぬ処ところから、時々は我知ら

ず口の中で稽古の男と一しよに唄うたったが、時々は目をつぶつて遠慮おくびなく曖おぼろをした後のち、身体からだを軽く左右さゆうにゆすりながらお豊の顔をば何の気もなく眺めた。お豊はもう四十以上であろう。薄暗つるしい釣つランプの光が瘦やせこけた小作りの身体からだをばなお更に老ふけて見せるので、ふいとこれが昔は立派な質屋しちやの可愛らしい箱はこ入娘いりむすめだつたのかと思うと、蘿月たは悲しいとか淋さびしいとかそういう現実の感慨を通過とおして、唯ただ唯ただ不思議な気がしてならない。その頃は自分もやはり若くて美しく、女にすかれて、道楽して、とうとう実家しちしようを七しち生しようまで勘かん当どうされてしまったが、今になつてはその頃の事はどうしても事実ではなくて夢としか思われぬ。算盤そろばんで乃公おれの頭おやじをなぐつた親爺おやじにしろ、泣いて意見をした白鼠しろねずみの

番頭にしろ、暖簾のれんを分けてもらつたお豊の亭主にしろ、そういう人たちは怒つたり笑つたり泣いたり喜んだりして、汗をたらして飽あきずによく働いていたものだが、一人ひとりひとり々々皆死んでしまつた今日きとなつて見れば、あの人たちはこの世の中に生れて来ても来なくてもつまる処は同じようなものだった。まだしも自分とお豊の生きている間は、あの人たちは兩人ふたりの記憶うちの中に残されているものの、やがて自分たちも死んでしまえばいよいよ何も彼かも煙になつて跡あと方かたもなく消え失うせてしまうのだ……。

「兄にいさん、実は二、三日うち中に私わたしの方からお邪魔あがに上ろうと思つていたんだよ。」とお豊が突然話はなしだした。

稽古きこの男は「小稲半兵衛こいなはんべえ」をさらつた後のち同じような「お妻八郎つまはち」

ろべえ
兵衛」の語出かたりだしを二、三度繰返くりかえして帰つて行つたのである。
蘿月もつとは尤もらしく坐すわり直なおして扇子で軽く膝ひざを叩たたいた。

「実はね。」とお豊は同じ言葉を繰返して、「駒込こまごめのお寺が市
区改正で取払いになるんだとき。それでね、死んだお父とつつアんの
お墓やなかを谷中そめいか何処どこかへ移さなくっちゃならないんだってね、
四、五日前にお寺からお使が来たから、どうしたものかと、その
相談に行こうと思つてたのさ。」

「なるほど。」と蘿月は領付うんぷずいて、「そういう事なら打捨うつちやつて
も置けまい。もう何年になるかな、親爺おやじが死んでから……。」

首かしを傾かしげて考かえたが、お豊の方は着々話しを進めて染井の墓地
の地代じだいが一坪ひとつぼいくら、寺への心付けがどうのこうのと、それに

ついでに女の身よりも男の蘿月に万事を引受けて取計らつてもら
 いたいというのであつた。

蘿月はもと こいしかわおもてまち 小石川表町の相模屋さがみやという質屋の後取息子あととりむすこで

あつたが勘当すえの末若隠居の身となつた。頑固な父が世を去つてか

らは妹お豊を妻にした店の番頭が正直に相模屋の商売をつづけて

いた。ところが御維新ごいっしんこの方時勢かたの変遷で次第に家運の傾いて

来た折も折火事にあつて質屋はそれなり潰つぶれてしまつた。で、風ふう

流うりゆうざんまい三昧さんまいの蘿月はやむをえず俳諧はいかいで世を渡るようになり、お

豊はその後亭主ごに死別れた不幸つづきに昔名を取つた遊芸を幸い

常磐津ときわづの師匠くらしで生計を立てるようになった。お豊には今年十八に

なる男の子が一人ある。零落れいらくした女親がこの世の楽しみという

のは全くこの一人息子 ちようきち 長吉の出世を見ようという事ばかりで、商人はいつ失敗するか分らないという経験から、お豊は三度の飯を二度にしても、行く行くはわが児 こ を大学校に入れて立派な月給取りにせねばならぬと思つてゐる。

蘿月 そうしよう 宗匠は冷えた茶を飲干 のみほ しながら、「長吉はどうしました。」

するとお豊はもう得意らしく、「学校は今夏休みですがね、遊ばしといちやいけなと思つて本郷 ほんごう まで夜学にやります。」

「じゃ帰りは晚 おそ いね。」

「ええ。いつでも十時過ぎますよ。電車はありますがね、随分遠 と 路 おみち ですからね。」

「吾輩こちとらとは違つて今時の若いものは感心だね。」宗匠は言葉を切つて、「中学校だつてね、乃公おれは子供を持った事がねえから当節うせつの学校の事はちつとも分らない。大学校まで行くにやまだよほどかかるのかい。」

「来年卒業してから試験を受けるんでさアね。大学校へ行く前にもう一ツ……大きな学校があるんです。」お豊は何も彼もか一口ひとくちに説明してやりたいと心ばかりは急つても、やはり時勢に疎うとい女の事で忽たちまちいい淀よどんでしまった。

「たいした経費かかりだろうね。」

「ええそれア、大抵じゃありませんよ。何しろ、あなた、月謝ばかりが毎月まいげつ一月、本代だつて試験の度々たんびに二、三円じゃききま

せんしね、それに夏冬ともに洋服を着るんでしよう、靴だつて年に二足は穿はいてしまいますよ。」

お豊は調子づいて苦心のほどを一倍強く見せようためか声に力を入れて話したが、蘿月はその時、それほどにまで無理をするなら、何も大学校へ入れなくても、長吉にはもつと身分相応な立身の途みちがありそうなものだという気がした。しかし口へ出していうほどの事でもないので、何か話題の変化をと望む矢先やさきへ、自然に思ひ出されたのは長告が子供の時分の遊び友達でお糸いとといった煎餅屋せんべいやの娘の事である。蘿月はその頃お豊の家を訪ねた時にはきまつて甥おいの長吉とお糸をつれては奥山おくやまや佐竹さたけツ原はらの見世物みせものを見に行ったのだ。

「長吉が十八じゃ、あの娘はもう立派な姉さんだろう。やはり稽古に来るかい。」

「家へは来ませんがね、この先の杵屋さんにや毎日通つてますよ。もう直き葎町へ出るんだっていいですがね……。」とお豊は何か考えるらしく語を切った。

「葎町へ出るのか。そいつア豪儀だ。子供の時からちよいと口のききようのませた、好い娘だったよ。今夜にでも遊びに来りやアいいに。ねえ、お豊。」と宗匠は急に元気づいたが、お豊はポンと長煙管をはたいて、

「以前とちがって、長吉も今が勉強ざかりだしね……。」

「ははははは。間違いでもあつちやならないというのかね。尤も

だよ。この道ばかりは全く油断がならないからな。」

「ほんとき。お前さん。」お豊は首を長く延のばして、「私の僻目ひがめか

も知れないが、実はどうも長吉の様子が心配でならないのさ。」

「だから、いわない事ことツちやない。」と蘿月は軽く握り拳こぶしで膝ひざ

頭しらをたたいた。お豊は長吉とお糸のことが唯何ただなんとなしに心配で

ならない。というのは、お糸が長なが唄うたの稽古なご歸りに毎朝用もない

のにきつと立寄つて見る、それをば長吉は必ず待つている様子で

その時間頃じかんころには一足ひとあしだつて窓の傍そばを去らない。そのみならず、

いつぞやお糸が病気で十日ほども寝ていた時には、長吉は外目よそめも

可笑おかしいほどにぼんやりしていた事などを息もつかずに語りつづ

けた。

次の間の時計が九時を打出した時突然格子戸こうしどががらりと明いた。その明けようでお豊はすぐに長吉の帰つて来た事を知り急に話を途切とぎらしその方に振返りながら、

「大変早いようだね、今夜は。」

「先生が病気で一時間早くひけたんだ。」

「小梅ここうめの伯父さんがおいでだよ。」

返事は聞えなかつたが、次の間に包つつみを投出す音がして、直様すぐさま長吉は温順おとなしそうな弱よわそうな色の白い顔を襖ふすまの間から見せた。

残暑の夕日が一しきり夏の盛よりも烈しく、ひろびろした河
 面一帯に燃え立ち、殊更ことさらに大学の艇庫ていこの真白まっしろなペンキ塗の板
 目に反映していたが、忽ち燈たちまもしびの光の消えて行くようにあたりは全
 体に薄暗く灰色に変色して来て、満ち来る夕汐ゆうしおの上を滑って行
 く荷船にぶねの帆のみが真白ましろく際立きわだった。と見る間もなく初秋しよしゆうの黄
 昏それがれは幕おりの下るように早く夜に変わった。流れる水がいやに眩まぶしく
 きらきら光り出して、渡船わたしぶねに乗っている人の形をくつきりと
 墨絵すみえのように黒く染め出した。堤の上に長く横よこたわる葉桜こたちの木立は
 此方こなたの岸から望めば恐いほど真暗まつくらになり、一時いちじは面白いよう
 に引きつづいて動いていた荷船はいつの間にか一艘いっそう残らず上流
 の方ほうに消えてしまつて、釣つりの帰りらしい小舟がところどころ木この

葉はのように浮いているばかり、見渡す隅すみ田だ川がわは再びひろびろとしたばかりか静しずかに淋さびしくなつた。遙か川かわ上かみの空のはずれに夏の名残を示す雲の峰が立っていて細い稲妻が絶間たえまなく閃ひらめいては消える。

長吉は先刻さつぎから一人ぼんやりして、或時あるは今戸橋いまだばしの欄干らんかんに凭もたれたり、或時は岸の石垣から渡場わたしばの栈橋さんばしへ下りて見たりして、夕日から黄昏、黄昏から夜になる河の景色を眺めていた。今夜暗くなつて人の顔がよくは見えない時分になつたら今戸橋の上でお糸と逢あう約束をしたからである。しかし丁度日曜日すまに当つて夜学校を口実くちにも出来ない処ところから夕飯ゆうめしを済すますが否やまだ日の落ゆきちぬ中うちふいと家うちを出てしまった。一しきり渡場へ急ぐ人の往來ゆきも

今では殆ど絶え、橋の下に夜泊りする荷船の燈火が慶養寺の高い木立を倒に映した山谷堀の水に美しく流れた。門口に柳のある新しい二階家からは三味線が聞えて、水に添う低い小家の格子戸外には裸体の亭主が涼みに出はじめた。長吉はもう来る時分であろうと思つて一心に橋向うを眺めた。

最初に橋を渡つて来た人影は黒い麻の僧衣を着た坊主であつた。つづいて尻端折の股引にゴム靴をはいた請負師らしい男の通つた後、暫くしてから、蝙蝠傘と小包を提げた貧し気な女房が日和下駄で色気もなく砂を蹴立てて大股に歩いて行つた。もういくら待つても人通りはない。長吉は詮方なく疲れた眼を河の方に移した。河面は先刻よりも一体に明るくなり気味悪い雲の

峯は影もなく消えている。長吉はその時長命寺辺の堤の上の
 木立から、他分たぶん旧曆七月の満月であろう、赤味を帯びた大きな月
 の昇りかけているのを認めた。空は鏡のように明いのでそれを遮さえぎ
 る堤と木立はますます黒く、星は宵の明星の唯たつ一つ見えるばかり
 りでその他はたことごと尽く余りに明い空の光に掻き消され、横ざまに長く
 棚曳たなびく雲のちぎれが銀色に透すきとお通つて輝いている。見る見る中満うち
 月が木立を離れるに従い河かわぎし岸の夜露をあびた瓦屋根や、水に湿ぬ
 れた棒ぼうぐい杭、満潮に流れ寄る石垣下の藻草もぐさのちぎれ、船の横腹、
 竹たけざお竿おなどが、逸いちはや早く月の光を受けて蒼あおく輝き出した。忽ち長
 吉は自分の影が橋板の上に段々に濃く描き出されるのを知った。
 通りかかるホーカイ節ぶしの男女が二人、「まア御覧よ。お月様。」

といつて暫く立止つた後、山谷堀の岸边に曲るが否や当付がましく、

書生さん橋の欄干に腰打かけて――

と立ちつづく小家の前で歌つたが金にならないと見たか歌いも了らず、元の急足で吉原土手の方へ行つてしまった。

長吉はいつも忍会の恋人が経験するさまさまの懸念と待ち

あぐむ心のいらだちの外に、何とも知れぬ一種の悲哀を感じた。

お糸と自分との行末……行末というよりも今夜会つて後の明日は

どうなるのであろう。お糸は今夜兼てから話のしてある葎町

の芸者屋まで出掛けて相談をして来るといふ事で、その道

中をば二人一緒に話しながら歩こうと約束したのである。お糸

がいよいよ芸者になつてしまえばこれまでのように毎日逢う事ができなくなるのみならず、それが万事の終りであるらしく思われなければならない。自分の知らない如何にも遠い国へと再び帰る事なく去つてしまうような気がしてならないのだ。今夜のお月様は忘れられない。一生に二度見られない月だなアと長吉はしみじみ思つた。あらゆる記憶の数々が電光のように閃く。最初地方町の小学校へ行く頃は毎日のように喧嘩して遊んだ。やがては皆なから近所の板塀や土蔵の壁に相々傘をかかれて囃された。小梅の伯父さんにつれられて奥山の見世物を見に行つたり池の鯉に魅をやつたりした。

三三社祭の折お糸は或年踊屋台へ出て道成寺を踊つた。

町内一同で毎年まいとし汐干狩しおひがりに行く船の上でもお糸はよく踊った。学校の帰り道には毎日のように待乳山まつちやまの境内けいだいで待合せて、人の知らない山谷さんやの裏町から吉原田圃よしわたんぼを歩いた……。ああ、お糸は何故なぜ芸者なんぞになるんだらう。芸者なんぞになつちやいけないと引止めたい。長吉は無理にも引止めねばならぬと決心したが、すぐその傍そばから、自分はお糸に対しては到底それだけの威力のな
 い事を思返おもいかえした。果敢はかない絶望あきらと諦めあきらめを感じた。お糸は二ツ年下の十六であるが、この頃になつては長吉は殊更ことさらに日一日とお糸が遥はるか年上の姉であるような心持がしてならぬのであつた。いや最初からお糸は長吉よりも強かつた。長吉よりも遥はるかに臆おくびよ病うではなかつた。お糸長吉と相々傘にかかれて皆なから囃され

た時でもお糸はびくともしなかつた。平気な顔で長ちゃんはあたいの旦那だんなだよと怒鳴どなつた。去年初めて学校からの帰り道を待乳山で待ち合あわそうと申もう出したしだのもお糸であつた。宮戸座みやとざの立見たちみへ行こうといつたのもお糸が先であつた。帰りの晩おそくなる事をもお糸の方がかえつて心配しなかつた。知らない道に迷つても、お糸は行ける処まで行つて御覧よ。巡査おまわりさんにきけば分るよといつて、かえつて面白そうにずんずん歩いた……。

あたりを構わず橋板の上に吾妻あずま下駄げだを鳴ならす響ひびがして、小走りに突然お糸がかけ寄つた。

「おそかつたでしょう。気に入らないんだもの、母おつかさんの結ゆつた髪かみなんぞ。」と馳かけ出したために殊こと更さらほつれた鬢びんを直しながら、

「おかしいでしょう。」

長吉はただ眼を円くしてお糸の顔を見るばかりである。いつもと変りのない元気のいいはしやぎ切った様子がこの場合むしろ憎らしく思われた。遠い下町したまちに行つて芸者になつてしまふのが少しも悲しくないのかと長吉はいいたい事も胸一ぱいになつて口には出ない。お糸は河かわ水みづを照す玉のような月の光にも一いっ向こう気のつかない様子で、

「早く行こうよ。私わたいお金持ちだよ。今夜は。仲なか店みせでお土産を買つて行くんだから。」とすたすた歩きだす。

「明日あした、きつと帰るか。」長吉は吃どもるようにしていい切つた。

「明日帰らなければ、明後日あさっての朝はきつと帰つて来てよ。不断着

だの、いろんなもの持つて行かなくっちゃならないから。」

待乳山の麓ふもとを 聖 天 町しょうでんちようの方へ出ようと細い路地ろじをぬけた。

「何故なぜ黙つてるのよ。どうしたの。」

あさつて

「明後日帰つて来てそれからまたあっちへ去いつてしまふらう。

え。お糸ちゃんは今もうそれなり向うの人になつちまうらう。

もう僕とは会えないらう。」

「ちよいちよい遊びに帰つて来るわ。だけれど、私もわたい一生懸命に

お稽古けいこしなくっちゃならないんだもの。」

少しは声を曇くもらしたもののその調子は長吉の満足するほどの悲愁

を帯びてはいなかった。長吉は暫しばらくしてからまた突然に、

「なぜ芸者なんぞになるんだ。」

「またそんな事きくの。おかしいよ。長さんは。」

お糸は已すでに長吉のよく知っている事情をば再びくどくどしく繰く返りかえした。お糸が芸者になるという事は二、三年いやもつと前か

ら長吉にも能よく分わつていた事である。その起因おこりは大工であつたお

糸の父親がまだ生きていた頃ころから母親おふくろは手内職てないしよくにと針仕事を

していたが、その得意とくいさき先の一軒で橋場はしばの妾しやうたく宅たくにいる御新造ごしんぞ

がお糸の姿を見て是非むすめぶん娘ぶん分ぶんにして行ゆくすえ末すえは立派な芸者にした

てたいといい出した事からである。御新造の実家は葭よしちよう町ちようで幅

のきく芸者げいしや家であつた。しかしその頃のお糸の家はさほどに困

つてもいなかつたし、第一に可愛い盛さかりの子供を手放すのが辛つらかつ

たので、親の手元でせいぜい芸を仕込ます事になつた。その後父ご

親が死んだ折には差さ当あり頼たりのない母親は橋場の御新造の世話で今の煎餅屋せんべいやを出したような関係もあり、万事が金銭上の義理ばかりでなくて相方そうほうの好意から自然とお糸は葭町へ行くように誰たれが強しいともなく決きまつていたのである。百も承知しているこんな事情を長吉はお糸の口からきくために質問したのでない。お糸がどうせ行かねばならぬものなら、もう少し悲しく自分のために別わかれを惜わしむような調子を見せてもらいたいと思つたからだ。長吉は自分とお糸の間にはいつの間まにか互たがいに疎通しない感情の相違の生じている事を明あかに知つて、更に深い悲かなみを感じた。

この悲みはお糸が土産物を買うため仁王門におうもんを過ぎて仲店なかみせへ出た時更にまた堪たえがたいものとなつた。夕涼ゆうすずみに出掛ける賑にぎや

かな人出の中にお糸はふいと立止つて、並んで歩く長吉の袖そでを引き、「長さん、あたしも直じきあんな扮装なりするんだねえ。紹縮緬ろちりめんだねきつと、あの羽織……。」

長吉はいわれるままに見返ると、島田に結ゆつた芸者と、それに連立つれだつて行くのは黒紹くろろの紋付をきた立派な紳士であつた。ああお糸が芸者になつたら一緒に手を引いて歩く人はやつぱりああいう立派な紳士であろう。自分は何年たつたらあんな紳士になれるのか知ら。兵児帯へこおび一ツの現在いまの書生姿がいうにいわれず情なく思われると同時に、長吉はその将来どころか現在すでにおいても、已すでに単純なお糸の友達たる資格さえないもののような心持がした。

いよいよ御神燈ごしんとうのつづいた葭町ろじぐちの路地口へ来た時、長吉はも

うこれ以上果敢はかないとか悲しいとか思う元気さえなくなつて、唯ただ
 ぼんやり、狭く暗い路地裏のいやに奥深く行先知れず曲まがりこ込んで
 いるのを不思議そうに覗のぞきこ込むばかりであつた。

「あの、一ひ二ふ三みイ……四つ目の瓦斯燈ガスとうの出てるところだよ。
 松葉屋まつばやと書いてあるだろう。ね。あの家うちよ。」とお糸はしばしば
 橋場の御新造につれて来られたり、またはその用事で使いに来た
 りして能よく知つている軒先のきさきの燈あかりを指し示した。

「じやア僕は帰るよ。もう……。」というばかりで長吉はやはり
 立止つている。その袖をお糸は軽く捕つかまえて忽たちまこびち媚るように寄添い、
 「明日あしたか明後日あさつて、家へ帰つて来た時うちきつと逢あおうね。いいかい。
 きつとよ。約束してよ。あたいの家うちへ出いでよ。よくツて。」

「ああ。」

返事をきくと、お糸はそれですつかり安心したものの如くすたすた路地の溝板どぶいたを吾妻下駄あずまげたに踏みならし振返りもせずに行つてしまつた。その足音が長吉の耳には急いで馳かけて行くように聞えた、かと思う間まもなく、ちりんちりんと格子戸の鈴の音がした。長吉は覚えあとず後を追つて路地内ろじうちへ這入はいろうとしたが、同時に一番近くの格子戸が人声と共に開あいて、細長い弓張提灯ゆみはりちようちんを持つた男が出て来たので、何なんという事なく長吉は気後れきおくのしたばかりか、顔を見られるのが厭いやさに、一散いっさんに通りの方へと遠とおざかつた。円い月は形が大分だいぶん小さいさなつて光が蒼あおく澄すみんで、静しずかに聳そびえる裏通りの倉の屋根の上、星の多い空の真中まんなかに高く昇のぼつていた。

三

月の出が夜よごとおそくなるにつれてその光は段々さ冴さえて来た。

河風かわかぜの湿しめッぽさが次第に強く感じられて来て浴衣ゆかたの肌がいやに

薄寒うすかぜくなつた。月はやがて人の起きている頃ころにはもう昇らなくな

つた。空には朝も昼過ぎも夕方も、いつでも雲が多くなつた。雲

は重かさなり合つて絶えず動いているので、時としては僅わずかにその間あいだ

々あいだに殊ことごとく更さららしく色の濃い青空の残りを見せて置きながら、空

一面おもに蔽かぶい冠かぶさる。すると気候は恐むしあつしく蒸暑むしあつくなつて来て、自

然しと浸しみ出る脂あぶら汗あせが不愉快に人の肌をねばねばさせるが、し

かしまた、そういう時にはきまつて、その強弱とその方向の定ま
 らない風が突然に吹き起つて、雨もまた降つては止み、止んでは
 また降りつづく事がある。この風やこの雨には一種特別の底深い
 力が含まれていて、寺の樹木や、河岸の葦の葉や、場末につづ
 く貧しい家の板屋根に、春や夏には決して聞かれない音響を伝え
 る。日が恐しく早く暮れてしまうだけ、長い夜はすぐに寂々と
 更ふけ渡つて来て、夏ならば夕涼みの下駄の音に遮さえぎられてよくは聞
 えない八時か九時の時の鐘があたりをまるで十二時の如く静しずかにし
 てしまう。蟋蟀こおろぎの声はいそがしい。燈火ともしびの色はいやに澄む。
 秋。ああ秋だ。長吉は初めて秋というものはなるほどいやなもの
 だ。実に淋さびしくつて堪たまらないものだと言にしみじみ感じた。

学校はもう昨日きのうから始つてゐる。朝早く母親の用意してくれる弁当箱を書物と一いっしょ所に包んで家うちを出て見たが、二日目三日目はつくづく遠い神田かんだまで歩いて行く氣力がなくなつた。今までは毎年まいねん長い夏休みの終る頃といえれば学校の教場なんが何となく恋しく授業の開始する日こころまちが心待まちに待たれるようであつた。そのういういしい心持はもう全く消えてしまつた。つまらない。学問なんぞしたつてつまるものか。学校は己おのれの望むような幸福を与える処ではない。……幸福とは無関係のものである事を長吉は物新しく感じた。

四日目の朝いつものように七時前に家うちを出て観音かんのんの境けいだい内ないまで歩いて来たが、長吉はまるで疲れきつた旅たび人びとが路傍みちばたの石いしに

腰をかけるように、本堂の横手のベンチの上に腰を下した。いつの間、掃除をしたものか朝露に湿った小砂利の上には、投捨てた汚い紙片もなく、朝早い境内はいつもの雑沓に引かえて妙に広く神々しく寂としてゐる。本堂の廊下には此処で夜明ししたらしい迂散な男が今だに幾人も腰をかけていて、その中には垢じみた単衣の二三尺帯を解いて平気で禪をしめ直している奴もあつた。この頃の空癖で空は低く鼠色に曇り、あたりの樹木からは虫囀んだ青いままの木葉が絶え間なく落ちる。烏や鶏の啼きこえはとはおとさわや声鳩の羽音が爽かに力強く聞える。溢れる水に濡れた御手洗の石が飜える奉納の手拭のかけにもう何となく冷いように思われ

た。それにもかかわらず朝参りの男女は本堂の階段を上る前にい

ずれも手を洗うためにと立止まる。その人々の中に長吉は偶然にも若い一人の芸者が、口には桃色のハンケチを啣くわえて、一重羽織ひとえばおりの袖そでぐち口を濡ぬらすまいためか、真白まっしろな手先をば腕までも見せるように長くさし伸のばしているのを認めた。同時にすぐ隣のベンチに腰をかけている書生が二人、「見ろ見ろ、ジンゲルだ。わるくないなア。」といっているのさえ耳にした。

島田に結ゆつて弱々しく両肩の撫なで下さがつた小作りの姿と、口尻くちじりのしまった円まる顔がお、十六、七の同じような年頃とが、長吉をしてその瞬間危あやうくベンチから飛び立たせようとしたほどお糸のことを連想せしめた。お糸は月のいいあの晩に約束した通り、その翌々日に、それから長く葭よしちよう町の人たるべく手荷物を取りに帰つ

て来たが、その時長吉はまるで別の人のようにお糸の姿の変つてしまつたのに驚いた。赤いメレンスの帯ばかり締め^しめていた娘姿が、突然たつた一日の間に、丁度今御手洗^{みたらし}で手を洗つてゐる若い芸者そのままの姿になつてしまつたのだ。薬指にはもう指環^{ゆびわ}さえ穿^はめていた。用もないのに幾度^{いくたび}となく帯の間から鏡入れや紙^{かみいれ}入^はを抜き出して、白粉^{おしろい}をつけ直したり鬢^{びん}のほつれを撫^なで上げたりする。戸外^{そと}には車を待たして置いていかにも急^{いそが}しい大切な用件を身に帯びてゐるといった風^{ふう}で一時間もたつたない中^{うち}に帰つてしまつた。その帰りがけ長吉に残した最後の言葉はその母親の「御^お師匠^{ししょう}さんのおばさん」にもよろしくいつてくれという事であつた。まだ何時^{いつ}出^でるのか分らないからまた近い中に遊びに来るわと

いう懐なつかしい声も聞きれないのではなかつたが、それはもう今までの
 あどけない約束ではなくて、世よ馴なれた人の如じよ才さいない挨拶あいさつとし
 か長吉には聞取れなかつた。娘であつたお糸、幼お馴な染じみの恋人の
 お糸はこの世にはもう生きていないのだ。路みち傍ばたに寝ている犬を
 驚おどろかして勢よく駈かけ去つた車の後あとに、えもいわれず立迷つた化粧の
 匂においが、いかに苦しく、いかに切せつなく身み中うちにしみ渡つたであろう
 ……

本堂の中にと消えた若い芸者の姿は再び階段の下に現れて仁におう
 王門もんの方へと、素足すあしの指先に突掛つつかけた吾妻下駄あずまげたを内輪うちわに軽く踏
 みながら歩いて行く。長吉はその後うしろ姿すがたを見送るとまた更に恨
 めしいあの車を見送つた時の一刹いっせつ那なを思起おも起おすので、もう何なんとし

ても我慢が出来ぬというようにベンチから立上った。そして知ら
 ず知らずその後を追うて仲店なかみせの尽るあたりまで来たが、若い芸
 者の姿は何処どこの横町よこちょうへ曲つてしまったものか、もう見えない。
 両側の店では店先を掃除して品物を並べたてている最中さいちゆうであ
 る。長吉は夢中で雷門かみなりもんの方へどんどん歩いた。若い芸者の行
 衛くえを見究めようというのではない。自分の眼にばかりありあり見
 えるお糸の後姿を追つて行くのである。学校の事も何も彼かも忘れ
 て、駒形こまかたから蔵前くらまえ、蔵前から浅草橋あさくさばし……それから葎町よしちよう
 の方へとどんどん歩いた。しかし電車の通つてとおいる馬喰町ばくろちようの大
 通りまで来て、長吉はどの横町を曲ればよかつたのか少しく当惑
 した。けれども大体の方角はよく分つている。東京に生れたもの

だけに道をきくのが厭いやである。恋人の住む町と思えば、その名を徒いたずらに路傍の他人に漏もらすのが、心の秘密を探られるようで、唯わけもなく恐しくてならない。長吉は仕方なしに唯ただ左へ左へと、いかげんに折れて行くと蔵造りの問屋らしい商家のつづいた同じような堀割の岸に二度も出た。その結果長吉は遙か向うに明治座じやの屋根を見てやがてやや広い往来へ出た時、その遠い道のはずれに河かわ蒸気船じょうきせんの汽笛の音の聞えるのに、初めて自分の位置と町の方角とを覚さとつた。同時に非常な疲労つかれを感じた。制帽かぶを冠かぶつた額ひたいのみならず汗は袴はかまをはいた帯のまわりまでしみ出していた。しかしもう一瞬間とても休む気にはならない。長吉は月の夜よに連れられて来た路地口ろじぐちをば、これはまた一層の苦心、一層の懸念けねん、一

層の疲労を以つて、やつとの事で見出し得たのである。

片側かたかわに朝日がさし込んでいるので路地の内うちは突当りまで見透みとお

された。格子戸こうしどづくりの小さい家ばかりでない。昼間見ると意外に

屋根の高い倉もある。忍返しのびがえしをつけた板塀いたべいもある。その上

から松の枝も見える。石灰いしばいの散つた便所の掃除口も見える。塵ご

芥箱みばこの並んだ処もある。その辺へんに猫がうろうろしている。人通り

は案外はずに烈しい。極めて狭い溝板どぶいたの上を通行の人は互たがいに身を斜

めに捻向ねじむけて行き交う。稽古けいこの三味線しゃみせんに人の話声が交まじつて聞え

る。洗物あらいものする水音みずおとも聞える。赤い腰巻すそに裾すそをまくつた小

女なが草箒くさぼうきで溝板の上を掃いている。格子戸の格子を一本々

々一生懸命に磨きいているのもある。長吉は人目の多いのに気後きおくれ

へと歩いて行つた。いかほど機会を待つても昼中はひるなかどうしても不便である事をわず僅かに悟り得たのであるが、すると、今度はもう学校へは遅くなつた。休むにしても今日の半日、これから午後三時までをどうして何処どこに消費しようかという問題の解決に迫せめられた。母親のお豊とよは学校の時間割までをよく知抜しりぬいているので、長吉の帰りが一時間早くても、晩おそくても、すぐうるさに心配して煩く質問する。無論長吉は何とでも容易たやすくいい紛まぎらすことは出来ると思ふものの、それだけの嘘うそをつく良心の苦痛に逢あうのが厭いやでならない。丁度来かかる川端には、水練場すいれんばの板小屋が取払われて、柳の木蔭こかげに人が釣つりをしている。それをば通りがかりの人が四人も五人もぼんやり立って見ているので、長吉はいい都合だと同じよう

に釣を眺める振ふりでそのそばに立寄たよりつたが、もう立たつているだけの
 力ちからさえなく、柳の根元の支さ木ぎに背せをよせかけながら蹲しゃがんでし
 まつた。

さつきから空の大半は真ま青つさおに晴はれて来きて、絶たえず風かぜの吹ふき通とお
 うにもかかわらず、じりじり人の肌はだに焼や附きつくような湿しつ気けのある秋
 の日は、目の前まへなる大おお川かわの水みづ一面いちめんに眩まぶしく照てり輝かがくので、往い来き
 の片側かたがはに長ながくつづいた土堀どほりからこんもりと枝えだを伸のした繁しげりの蔭かげが
 いかにも涼すずしそうに思おもわれた。甘酒屋あまざけやの爺じじがいつかこの木蔭こかげに
 赤あかく塗ぬつた荷おろを下おろしていた。川かわ向むこうは日ひの光ひかりの強つよいために立た続つ
 く人家かみの瓦屋根かわらやねをはじめ一帯いちたいの眺望たっぼうがいかにも汚けらしく見みえ、
 風かぜに追おいやられた雲くもの列らが盛さかんに煤煙ばいえんを吐はく製せい造ぞう場ばの烟筒けむだしよ

りも遙はるかに低く、動かずに層をなして浮うかんでいる。釣道具を売うしる後
 の小家こいえから十一時の時計が鳴った。長吉は数えながらそれを聞いて、
 初めて自分はいかに長い時間を歩き暮したかに驚いたが、同
 時にこの分ぶんで行けば三時までの時間を空費するのもしさして難かたくは
 ないとやや安心することも出来た。長吉は釣師つりしの一人が握にぎり飯めし
 を食いはじめたのを見て、同じように弁当箱を開いた。開いたけ
 れども何だか気まりが悪くて、誰か見ていやしないかときよろき
 よろ四辺あたりを見廻した。幸い午ひる近ちかくのことで見渡す川岸に人の往
 来は杜絶とだえている。長吉は出来るだけ早く飯めしでも菜さいでも皆みんなな鵜吞うの
 みにしてしまった。釣師はいずれも木像のように黙もくっているし、
 甘酒屋の爺は居眠りしている。午ひる過すぎの川端はますます静しずになつ

て犬さえ歩いて来ない処から、さすがの長吉も自分は何故なぜこんな
に気まりを悪がるのであろう。臆おくびよう病びようなのであろうと我ながら可お
笑かしい気にもなつた。

両りよう国橋こくばしと新大橋しんおおはしとの間をひとまわり一廻ひとまわりした後のち、長吉はいよい

よ浅草あさくさの方へ帰ろうと決心するにつけ、「もしや」という一念

にひかされて再び葭町の路地口に立寄つて見た。すると午ひるまえ前まえほ

どには人通りがないのに先まず安心して、おそるおそる松葉屋の前

を通つて見たが、家うちの中は外から見ると非常に暗く、人の声三味

線の音さえ聞えなかつた。けれども長吉には誰にも咎とがめられずに

恋人の住む家うちの前を通つたというそれだけの事が、殆ほとんど破はてんこ天てん

荒うの冒険を敢あえてしたような満足を感じさせたので、これまで歩

きぬいた身の疲労と苦痛とを長吉は遂ついにに後悔しなかつた。

四

その週間の残りの日数ひかずだけはどうかやらこうやら、長吉は学校へ通つたが、日曜日一日を過すこすとその翌あくるあさ朝は電車に乗つて上野うえのまで来ながらふいと下りてしまつた。教師に差出すべき代数の宿題を一つもやつて置かなかつた。英語と漢文の下したよみ読をもして置かなかつた。そのみならず今日はまた、凡およそ世の中で何よりも嫌いな何よりも恐しい機械体操のある事を思い出したからである。長吉には鉄棒から逆さかさにぶらさがったり、人の丈たけより高い棚の上か

ら飛下りるような事は、いかに軍曹ぐんそう上りの教師から強しいられても全級の生徒から一いつせい齊せいに笑われても到底出来得うべきことではない。何によらず体育の遊戯にかけては、長吉はどうしても他の生徒一同に伴ともなつて行く事が出来ないので、自然と輕侮けいぶの声の中に孤立する。その結果は、遂に一同から意地悪くいじめられる事になりやすい。学校は単にこれだけでも随分厭いやな処、苦しいところ、辛い処つらであつた。されば長吉はその母親がいかに望んだ処で今になつては高等学校へ這はい入いろうという氣は全くない。もし入学すれば校則として当初はじめの一年間は是非とも狂暴無残な寄宿舎生活をしなければならぬ事を聴き知きつていたからである。高等学校寄宿舎内に起るいろいろな逸話いつわは早くから長吉の胆きもを冷ひやしているので

あつた。いつも画学と習字にかけては全級誰も及ぶもののない長吉の性情は、鉄拳てつけんだとか柔術だとか日本魂やまとだましだとかいうものよりも全く異ちがつた他の方面に傾かたいていた。子供の時から朝夕に母が渡世とせの三味線しませんを聴くのが大好きで、習わずして自然いに絃いとの調子を覚え、町を通る流行唄はやりうたなどは一度聴けば直すぐに記憶する位であつた。小梅こうめの伯父なる蘿月らげつ宗匠そうしようは早くも名人になるべき素質があると見抜いて、長吉をば檜物町ひものちようでも植木店うえきだなでも何処どこでもいいから一流の家元へ弟子入をさせたらばとお豊に勧めたがお豊は断じて承諾しなかつた。のみならず以来は長吉に三味線いじを弄いじる事をば口喧くちやかましく禁止した。

長吉は蘿月の伯父さんのいったように、あの時分から三味線いじを

稽古けいこしたなら、今頃はとにかく一人前いちにんまえの芸人になつていたに違ちがいない。さすればよしやお糸が芸者になつたにした処で、こんなみじめに悲惨な目に遇あわずとも済んだであろう。ああ実に取返しとりかへのつかない事をした。一生の方針を誤つたと感じた。母親が急に憎にくくなる。例えられぬほど怨うらめしく思われるに反して、蘿月の伯父さんの事ことが何なんとなく取とり継つがつて見たいように懐なつかしく思返おもひかへされた。これまでは何の気もなく母親からもまた伯父自身の口からも度たび々たび聞きかされていた伯父が放ほう蕩とう三さん昧まいの経歴が恋の苦痛を知り初はじめた長吉の心には凡すべて新しい何かの意味を以て解釈されはじめた。長吉は第一に「小梅の伯母さん」というのは元もと金きん瓶べい大だい黒こくの華おいらん魁けんで明治の初め吉原よしわら解放の時小梅の伯父さんを頼つて来たのだと

やらいう話を思出した。伯母さんは子供の頃自分をば非常に可愛
がってくれた。それにもかかわらず、自分の母親のお豊はあまり
好くは思っていない様子で、盆暮の挨拶もほんの義理一遍
らしい事を構わず素振に現していた事さえあつた。長吉は此処で
再び母親の事を不愉快にかつ憎らしく思った。殆ど夜の目も離さ
ぬほど自分の行いを目成っているらしい母親の慈愛が窮屈で堪ら
ないだけ、もしこれが小梅の伯母さん見たような人であつたら—
—小梅のおばさんはお糸と自分の二人を見て何ともいえない情の
ある声で、いつまでも仲よくお遊びよといつてくれた事がある—
—自分の苦痛の何物たるかを能く察して同情してくれるであろう。
自分の心がすこしも要求していない幸福を頭から無理に強いはせ

まい。長吉は偶然にも母親のような正しい身の上の女と小梅のお
 ばさんのような或種あるしゆの経歴ある女との心理を比較した。学校の
 教師のような人と蘿月伯父さんのような人とを比較した。

午頃ひるごろまで長吉は東照宮とうしやうぐうの裏手の森の中で、捨石すていしの上
 横よこわりながら、こんな事を考えつづけた後あとは、包つつみの中にかくした
 小説本を取出して読み耽ふけった。そして明日あした出すべき欠席届にはい
 かにしてまた母の認みとめいん印を盗むべきかを考えた。

五

一ひとしきり毎日毎夜のように降りつづいた雨の後あと、今度は雲一ツ

見えないような晴天が幾日と限りもなくつづいた。しかしどうか
 して空が曇ると忽ちに風たちまが出て乾ききつた道の砂を吹散ふきちらす。こ
 の風と共に寒さは日にまし強くなつて閉切しめきつた家の戸や障子しようじが
たえま絶間なくがたりがたりと悲しげに動き出した。長吉は毎朝七時に
はしま始る学校へ行くためおそ晩くも六時には起きねばならぬが、すると毎
 朝の六時おきが起るたびに、だんだん暗くなつて、遂には夜と同じく
 家の中には燈ともしび火の光を見ねばならぬようになった。毎まいとし年冬の
 はじめに、長吉はこの鈍にぶい黄きいろい夜明よあけのランプの火を見ると、何と
 もいえぬ悲しい厭いやな気がするのである。母親はわが子を励ますつ
 もりで寒ねまきすがたそうな寝衣姿のままながら、いつも長吉よりは早く起
 きて暖あさめしい朝飯あさめしをばちやんと用意して置く。長吉はその親切をす

まないと感じながら何分なにぶんにも眠くてならぬ。もう暫くしばら炬燵こたつにあ
 たつていたいと思うのを、むやみと時計ばかり気にする母にせき
 たてられて不平だらだら、河風かわかぜの寒い往来おうらいへ出るのである。或
 時はあまりに世話を焼かれ過るすぎのに腹を立てて、注意される襟えりま
 巻きをわざと解ときすてて風邪かぜを引いてやった事もあった。もう返
 らない幾年か前らげつ蘿月の伯父につれられお糸も一いっしょ所に西とりの市いちへ行
 った事があつた……毎まい年としその日の事を思い出す頃から間まもなく、
 今年も去年と同じような寒い十二月がやって来るのである。

長吉は同じようなその冬の今年と去年、去年とその前年、それ
 からそれと幾年さかのぼも溯ぼつて何心なく考えて見ると、人は成長するに
 従つていかに幸福を失つて行くものかを明あきらかに経験した。まだ学

校へも行かぬ子供の時には朝寒ければゆつくりと寝たいだけ寝て
 いられたばかりでなく、身体からだの方もまたそれほどに寒さを感じず
 ことが烈はげしくなかつた。寒い風や雨の日にはかえつて面白く飛び
 歩いたものである。ああそれが今の身になつては、朝早く今戸いまどの
 橋の白い霜を踏むのがいかにも辛つらくまた昼過ぎにはいつも木枯こがらし
 の騒ぐ待乳山まつちやまの老樹に、早くも傾く夕日の色がいかにも悲しく
 見えてならない。これから先の一年一年は自分の身にいかなる新
 しい苦痛を授けるのであろう。長吉は今年の十二月ほど日数ひかずの早
 くたつのを悲しく思つた事はない。観音かんのんの境内けいだいにはもう年とし
 市いちが立つた。母親のもとへとお歳暮のしるしにお弟子が持つて来
 る砂糖袋や鱧かつぶし節ふしなぞがそろそろ床とこの間まへ並び出した。学校の学

期試験は昨日すんで、ひとかた一方ならぬその不成績に対する教師の注ち意書ゆういがきが郵便で母親の手許に送り届けられた。

初めから覚悟していた事なので長吉は黙って首をたれて、何か

につけてすぐに「親一人子一人」と哀あわれツつぼい事をいい出す母親の

意見を聞いていた。ひるまえけいこ午前稽古けいこに来る小娘たちが帰つて後午過のちひるすぎ

には三時過ぎてからでなくては、学校帰りの娘たちはやつて来ぬ。

今が丁度母親が一番手すきの時間である。風がなくて冬の日が往

来の窓一面にさしている。折から突然まだ格子戸こうしどをあけぬ先から、

「御免ごめんなさい。」という華は美でな女の声、母親が驚いて立つ間まもな

く上あがり框がまちの障子の外から、「おばさん、わたしよ。御無沙汰ごぶさたし

ちまつて、お詫わびに来たんだわ。」

長吉は顫ふるえた。お糸である。お糸は立派なセルの吾妻あずまコオトの紐ひもを解とき解とき上あつて来た。

「あら、長ちやうちゃんもいたの。学校がお休み……あら、そう。」それから付けたように、ほほほと笑つて、さて丁寧ていねいに手をついて御辞儀ごじぎをしながら、「おばさん、お変りもありませんの。ほんとに、つい家うちが出でにくいものですから、あれツきり御無沙汰ごむさたしちまつて……。」

お糸は縮ちりめん緬ふろしきの風呂敷ふろしきにつつんだ菓子折かみじりを出した。長吉は呆氣あつけに取られたさまで物もいわずにお糸の姿すがたを目成みまもつている。母親ははもちよつと烟けむに巻まかれた形で進しんもつ物の礼れいを述べた後、「きれいにおなりだね。すっかり見違えちまつたよ。」といった。

「いやにふけちまったでしょう。皆みんなそういつてよ。」とお糸は美しく微笑ほほえんで紫縮緬むらさきの羽織の紐の解けかかったのを結び直すついでに帯の間から緋天鷲絨ひびろうどの煙草入たばこいれを出して、「おばさん。わたし、もう煙草喫のむようになったのよ。生意氣でしょう。」

今度は高く笑った。

「こつちへおよんなさい。寒いから。」と母親のお豊は長火鉢の鉄瓶てつびんを下おろして茶を入れながら、「いつお弘ひろめしたんだえ。」

「まだよ。ずっと押詰おしづまってからですって。」

「そう。お糸ちゃんなら、きつと売れるわね。何しろ綺麗きれいだし、ちやんともう地じは出来ているんだし……。」

「おかげさまでねえ。」とお糸は言葉を切つて、「あつちの姉さ

んも大変に喜んでたわ。私なんかよりもっと大きなくせに、それア随分出来ない娘こがいるんですもの。」

「この節せつの事ことだから……。」「お豊はふと気がついたように茶棚から菓子鉢を出して、「あいにく何なんにもなくって……。道どうりよう了りようさまのお名物だつて、ちよつとおつなものだよ。」と箸はしでわざわざ摘つまんでやつた。

「お師匠つしよさん、こんちは。」と甲かんだか高たかな一本調子で、二人ふたりづれの小娘が騒々しく稽古けいこにやつて来た。

「おばさん、どうぞお構かまいなく……。」「

「なにいいんですよ。」といったけれどお豊はやがて次の間まへ立つた。

長吉は妙に氣まりが悪くなつて自然に俯向いたが、お糸の方は一向變つた様子もなく小声で、

「あの手紙届いて。」

隣の座敷では二人の小娘が声を揃えて、嵯峨やお室の花ざかり。長吉は首ばかり頷付せてもじもじしている。お糸が手紙を寄越ししたのは一の酉の前時分であつた。つい家が出にくいというだけの事である。長吉は直様別れた後の生涯をこまごまと書いて送つたが、しかし待ち設けたような、折返したお糸の返事は遂に聞く事が出来なかつたのである。

「観音さまの市だわね。今夜一所に行かなくつて。あたい今夜泊つてツてもいいんだから。」

長吉は隣座敷の母親をきがね気兼ねして何とも答える事ができない。お糸は構わず、

「御飯たべたら迎いに来てよ。」といったがその後で、あと「おばさんも一所にいらッしやるでしょうね。」

「ああ。」と長吉は力の抜けた声になった。

「あの……。」お糸は急に思出して、「小梅の伯父さん、どうなすつて、お酒に酔えつて羽子はごいた板屋のお爺じいさんと喧嘩けんかしたわね。何時いつだったか。私わたし怖くなツちまツたわ。今夜いらッしやればいいのに。」

お糸は稽古すきうかの隙を窺かがつてお豊あいさつに挨拶して、「じゃ、晩ほど。

どうもお邪魔いたしました。」といいながらすたすた帰った。

六

長吉は風邪かぜをひいた。七ななくさ草過ぎて学校はじまが始つた処から一日無理をして通学したために、流行のインフルエンザに變つて正月一ぱい寝通してしまつた。

八幡さまの境内に今日は朝から初はつうま午の太鼓が聞える。暖おだやかい穏おだやかな午ひるすぎ後の日光が一面にさし込む表の窓の障子には、折おり々おり軒のきを掠かすめる小鳥の影が閃ひらめき、茶の間の隅の薄暗い仏壇の奥までが明あかるく見え、床とこの間の梅まがもう散りはじめた。春は閉切しめきつた家うちの中までも陽気におとずれて来たのである。

長吉は二、三日前から起きていたので、この暖い日をぶらぶら散歩に出掛けた。すっかり全快した今になって見れば、二十日以^{はつか}上も苦しんだ大病を長吉はもっけの幸いであつたと喜んでゐる。とても来月の学年試験には及第する見込みがないと思つていた処^{ところ}なので、病氣欠席の後^{あと}といえ、落第しても母^{もつと}に対して尤^{もつと}至極^{ごく}な申^{もうしわけ}訳^{わけ}ができると思^{おも}うからであつた。

歩いて行く中^{うち}いつか浅^{あさくさ}草公園の裏手へ出た。細い通りの片側には深い溝^{どぶ}があつて、それを越した鉄柵^{てつさく}の向うには、処^{ところ}々^{どころ}の冬枯^{ふゆか}れして立つ大木^{たいぼく}の下に、五区^{ごく}の揚弓^{ようきゆう}店^{てん}の汚^{きた}らしい裏手^{うしろ}がつづいて見える。屋根の低い片側^{かたか}町^{まち}の人家^{にや}は丁度^{ちやうど}後^ごから深い溝の方へと押詰められたような気がするので、大方そのため

であろう、それほどに混雑もせぬ往来がいつも妙に忙しく見え、う
 ろうろ徘徊はいかいしている人相にんそうの悪い車夫しやふがちよつと風采かざりの小綺麗こぎれい
 な通行人の後に煩あとうるさく付き纏まとつて乗車を勧めすすめている。長吉はいつも
 巡査たちばんが立番たちばんしている左手の石橋いしばしから淡島あわしまさまの方までがず
 つと見透みとおされる四辻よつつじまで歩いて来て、通りがかりの人々が立止
 ちて眺めるままに、自分も何という事なく、曲り角に出してある
 宮戸座みやとざの絵看板えかんばんを仰いだ。

いやに文字の間をくツ付けて模様のように太く書いてある名題なだい
 の木札きくだを中央まんなかにして、その左右には恐しく顔ちいさの小さい、眼おおきの大きい、
 指先の太い人物が、夜具をかついだような大い着物おおきを着て、さま
 ざまな誇張的の姿勢で活躍しているさまが描えがかれてある。この大

きい絵看板を蔽おほう屋根形の軒には、花車だしにつけるような造り花が美しく飾りつけてあつた。

長吉はいかほど暖い日和ひよりでも歩いているときすがにまだ立春になつたばかりの事とて暫しばらくの間寒い風をよける処をと思ひ出した矢先やさき、芝居の絵看板を見て、そのまま狭い立見たちみの戸口へと進み寄つた。内うちへ這入ると足場の悪い梯子段はしごだんが立つていて、その中なかはどから曲るあたりはもう薄暗く、臭い生なま暖あたい人込ひとごみの温気うんきがなお更暗い上の方から吹き下りて来る。頻しきりに役者の名を呼ぶ掛かけご声えが聞える。それを聞くと長吉は都会育ちの観劇者ばかりが経へ験けんする特種とくしゆの快感と特種の熱情とを覚えた。梯子段の二、三段を一躍ひととびに駈かけ上あがつて人込みの中に割込むと、床板ゆかいたの斜ななめになつ

た低い屋根裏の おおむこう 大 向 おむこう は大きな船の底へでも下りたような心持。
 後の隅々 すみずみ についている瓦斯 ガス の裸火 はだかび の光は一ぱいに詰 つま っている
 見物人の頭に遮 さえぎ られて非常に暗く、狭苦しいので、猿のように人
 のつかまつている前側の鉄棒から、向うに見える劇場の内部は天
 井ばかりがいかにも広々と見え、舞台は色づき濁った空気のため
 にかえつて小さく甚 はなはだ 遠く見えた。舞台はチョンと打った拍子木の
 音に今丁度廻 とま って止った処である。極めて一直線な石垣を見せた
 台の下に汚れた水色の布が敷いてあつて、後 うしろ を限る書割 かきわり には小
 く大名屋敷 だいまようやしき の練塀 ねりべい を描 えが き、その上の空一面をば無理にも夜
 だと思わせるように隙間 すきま もなく真黒 まっくろ に塗 ま りたてである。長吉は
 観劇に対するこれまでの経験で「夜」と「川端 かわばた」という事から、

きつと殺し場に違いないと幼い好奇心から丈伸びをして首を伸すのばと、果せるかな、絶えざる低い大太鼓の音に例の如く板をバタバタ叩く音が聞えて、左手の辻番小屋の蔭から仲間と塵を抱えた女とが大きな声で争いながら出て来る。見物人が笑った。舞台の人物は落したものを捜す体で何かを取り上げると、突然前とは全く違った態度になつて、極めて明瞭に浄瑠璃外題「梅柳うめやなぎなかもよいづき」中宵月、勤めまする役人……と読みはじめる。それを待構えて彼方此方から見物人が声をかけた。再び軽い拍子木の音を合かみしも図に、黒衣の男が右手の隅に立てた書割の一部を引取ると袴を着た浄瑠璃語三人、三味線弾二人が、窮屈そうに狭い台の上に並んでいて、直ぐに弾出す三味線からつづいて太夫が声を合あわし

てかたり出した。長吉はこの種の音楽にはいつも興味を以て聞き馴なれているので、場内の何処どこかで泣き出す赤児あかごの声とそれを叱咤しつたする見物人の声に妨げられながら、しかも明あきらかに語る文句と三味線の手までを聴きき分ける。

朧おぼろ夜よに星の影さへ二ツ三ツ、四ツか五ツか鐘かねの音も、もしや我身わがみの追手おつてかと……

またしても軽いバタバタが聞えて夢中になつて声をかける見物人のみならず場じょう中ちゆう 一体けしきが気色立だつ。それも道理だ。赤じゆばい襦ほ袢はんの上に紫むらさき繻き子じゆうすの幅えり広い襟えりをつけた座敷着の遊女あそびが、冠かぶる手て拭ぬぐい顔かほをかくして、前まへかがまりに花道はなみちから駈出かけだしたのである。「見えねえ、前まへが高いツ。」「帽子をとれツ。」「馬鹿野郎

。「なぞと怒鳴るものがある。」

落ちて行衛も白魚の、舟のかがりに網よりも、人目いと

うて後先に……

女に扮した役者は花道の尽きるあたりまで出て後を見返りながら台詞を述べた。その後、に唄がつづく。

しばし、む上手より梅見返りの舟の唄。忍ぶなら忍ぶ

なら闇の夜は置かしやんせ、月に雲のさはりなく、辛気待

つ宵、十六夜の、内の首尾はエーよいとのよいとの。聞

く辻占に、いそいそと雲足早き雨空も、思ひがけなく吹

き晴れて見かはす月の顔と顔……

見物がまた騒ぐ。真黒に塗りたてた空の書割の中央を大きく

穿くりぬ抜ぬいてある円まるい穴あなに灯ひがついて、雲くも形がたの蔽おほいをば糸いとで引ひ上げ
 るのが此こなた方なたからでも能よく見みえた。余あまりに月つきが大おおきく明あかるいから、大
 名屋敷なみやぢの堀ほりの方が遠とほくて月つきの方がかえつて非常ひじょうに近ちかく見みえる。し
 かし長吉ちやうきちは他の見物けんぶつも同様どうよう少しも美うつくしい幻想げんさうを破やぶられなかつた。
 それのみならず去年こぞの夏なつの末すえ、お糸いとを葭よし町ちやうへ送おくるため、待まち
 合あした今いま戸どの橋はしから眺ながめた彼あの大きおおな円まるい円まるい月つきを思おもい起おこす
 と、もう舞台ぶたいは舞台ぶたいでなくなつた。

着流きりやうし散さん髪ぱつの男おとこがいかにも思おもいやつれた風ふうで足あし許もと危あやうく歩あみ
 出でる。女おんなと摺すれちがいに顔かほを見合みあして、

「十六夜いざよひか。」

「清心せいしんさまか。」

女は男に縋すがつて、「逢あひたかつたわいなア。」

見物人が「やア御ご両りやう人にん。」「よいしよ。やけます。」なぞと

叫ぶ。笑う声。「静かにしろい。」と叱しかりつける熱情家もあつた。

舞台は相愛あいする男女の入水じゆすいと共に廻まわつて、女の方が白魚舟しらうおぶね

の夜網よあみにかかつて助けられる処になる。再び元の舞台に返かえつて、

男も同じく死ぬ事が出来なくて石垣いしがきの上に這はい上あがる。遠くの騒さわぎ

唄うた、富貴ふうきの羨望せんぼう、生存の快樂、境遇の絶望、機会と運命、誘惑、

殺人。波瀾はらんの上にも脚色の波瀾を極めて、遂に演劇ひとまくの一幕が終

る。耳元近くから恐おそしい黄きいろい声こゑが、「変かるよ——ウ」と叫こゝろび出し

た。見物人が出口の方へと崩なだれを打うつて下おりかける。

長吉は外へ出ると急いで歩いた。あたりはまだ明いけれどもう
 日は当っていない。ごたごたした千束町の小売店の暖簾や旗
 なぞが激しく翻っている。通りがかりに時間を見るため腰をかか
 めて覗いて見ると軒の低いそれらの家の奥は真暗であった。長
 吉は病後の夕風を恐れてますます歩みを早めたが、しかし山谷
 堀から今戸橋の向に開ける隅田川の景色を見ると、どうし
 ても暫く立止らずにはいられなくなった。河の面は悲しく灰色に
 光っていて、冬の日の終りを急がす水蒸気は対岸の堤をおぼろに
 霞めている。荷船の帆の間をば鷗が幾羽となく飛び交う。長吉は
 どんどん流れて行く河水をば何がなしに悲しいものだと思つた。
 川向の堤の上には一ツ二ツ灯がつき出した。枯れた樹木、乾

いた石垣、汚れた瓦屋根、目に入るものは尽く褪せた寒い色をして
 いるので、芝居を出てから一瞬間とても消失せぬ清心と十
 六夜の華美やかな姿の記憶が、羽子板の押絵のよう^{はごいた おしえ}にまた一段と
 際立^{きわだ}つて浮び出す。長吉は劇中の人物をば憎いほどに羨^{うらや}んだ。い
 くら羨んでも到底及びもつかないわが身の上を悲しんだ。死んだ
 方がましだと思^{おもう}だけ、一緒に死んでくれる人のない身の上を更
 に痛切に悲しく思^{おも}つた。

今戸橋を渡りかけた時、掌^{てのひら}でびしやりと横^{よこ}面^{つら}を張^{はり}撲^{なぐ}るよう
 な河風。思^{おも}わず寒さに胴^{どうぶる}顫^{ふる}いすると同時に長吉は咽喉^{のど}の奥^{おく}から、
 今までは記憶しているとも心付^{こころ}かず^づにいた浄瑠璃^{じようるり}の一^{いっ}節^{せつ}がわ
 れ知らずに流れ出るのに驚^{おどろ}いた。

今さらいふも愚痴なれど……

と清元きよもとの一派が他流の模すべからざる曲調きょくちやうの美麗を托した
 いっせつ
 一節である。長吉は無論太夫たゆうさんが首と身体からだを伸上のびあがらして唄
 ったほど上手に、かつまたそんな大きな声で唄ったのではない。
 咽喉から流れるままに口の中で低唱ていしようしたのであるが、それに
 よつて長吉はやみがたい心の苦痛が幾分か柔やわらげられるような心持
 がした。今更いうも愚痴なれど……ほんに思えば……岸より覗のぞく
 青柳あおやぎの……と思出おもいだす節ふしの、ところどころを長吉は家うちの格子戸こうしど
 を開ける時まで繰返くりかえし繰返くりかえし歩いた。

あくるひ
翌日の午後ひるすぎにまたもや宮戸座みやとぎの立見たちみに出掛けた。長吉は恋

の二人が手を取って嘆く美しい舞台から、昨日きのう始めて経験したい
うべからざる悲哀の美感に酔えいたいと思つたのである。そればか
りでなく黒ずんだ天井と壁襖かぶすまに囲まれた二階の室へやがいやに陰気臭
くて、燈火とうかの多い、人の大勢集つている芝居にぎわの賑にぎわいが、我慢の出
来ぬほど恋しく思われてならなかつたのである。長吉は失つたお
糸の事以外に折おり々は唯ただ何という訳わけもなく淋さびしい悲しい気がす
る。自分にもどういふ訳わけだか少しも分らない。唯だ淋しい、唯だ
悲しいのである。この寂せき寞ぼくこの悲哀を慰めるために、長吉は定
めがたい何物かを一刻一刻に激しく要求して止やまない。胸の底に

潜ひそんだ漠然たる苦痛を、誰と限らず優しい声で答えてくれる美しい女に訴えて見たくてならない。単にお糸一人の姿のみならず、往来で摺すれちがった見知らぬ女の姿が、島田の娘になったり、銀いちようがえしちの芸げい者いしやになったり、または丸まるまげ髻げの女房姿になったりして夢の中に浮ぶ事さえあつた。

長吉は二度見る同じ芝居の舞台をば初めてののように興味深く眺めた。それと同時に、今度は賑にぎやかな左右の棧さじき敷きに対する観察をも決して閑却しなかつた。世の中にはあんなに大勢女がいる。あんなに大勢女のいる中で、どうして自分は一人も自分を慰めてくれる相手に邂めぐりあ逅あわないのであろう。誰れでもいい。自分に一ひとこと言ことばやさしい語ことばをかけてくれる女さえあれば、自分はこんなに切なく

お糸の事ばかり思いつめてはいまい。お糸の事を思えば思うだけその苦痛をへらす他のものが欲しい。さすれば学校とそれに関連した身の前途に対する絶望のみに沈められてはいまい……。

立見の混雑の中にその時突然自分の肩を突くものがあるので驚いて振向くと、長吉は鳥打帽とりうちぼうを眉深まぶかに黒い眼鏡をかけて、後の一段高い床ゆかから首を伸のばして見下す若い男の顔を見た。

「吉さんきちじゃないか。」

そういったものの、長吉は吉さんの風采ふうさいの余りに変っているのしばらに暫くは二の句がつけなかつた。吉さんというのは地方町じかたまちの小学校時代の友達で、理髪師とこやをしている山谷さんやどお通りの親爺おやじの店で、これまで長吉の髪をかってくれた若衆わかいしゅである。それが絹ハン

ケチを首に巻いてにじゅうまわし二重廻におしまつむぎの下から大島紬おしまつむぎの羽織を見せ、
いやに香水をにお匂わせながら、

「長さんちよう、僕は役者だよ。」と顔をさし出して長吉の耳元にささや囁いた。

立見の混雑の中でもあるし、長吉は驚いたまま黙っているより
仕様がなかったが、舞台はやがて昨日きのうの通りに河端かわばたの暗闘だんまりに
なつて、劇の主人公が盗んだ金を懐ふところ中に花道へかけい駈出でながら石い
しつぶて

礫れきを打つ、それを合図にチョンと拍子木が響く。幕が動く。

立見の人ひとなか中から例の「変るよーウ」と叫ぶ声。人崩れひとなだが狭い

出口の方へと押合うちあう間に幕がすっかり引かれて、シャギリの太鼓
が何処どこか分らぬ舞台の奥から鳴り出す。吉さんは長吉の袖そでを引止

めて、

「長さん、帰るのか。いいじゃないか。もう一幕見ておいでな。」
 役者の仕着せを着た賤しい顔の男が、
 洩紙を張った小箆をも
 つて、次の幕の料金を集めに来たので、長吉は時間を心配しながらもそのまゝ居残った。

「長さん、綺麗だよ、掛けられるぜ。」吉さんは人のすいた後の
 明り取りの窓へ腰をかけて長吉が並んで腰かけるのを待つように
 して再び「僕ア役者だよ。変ったろう。」といいながら友禪
 縮緬の襦袢の袖を引き出して、わざとらしく脱した黒い金縁
 眼鏡の曇りを拭きはじめた。

「変ったよ。僕ア始め誰かと思つた。」

「驚いたかい。ははははは。」吉さんは何ともいえぬほど嬉しそ
うに笑つて、「頼むぜ。長さん。こう見えたつて憚りながら役者
だ。伊井一座の新俳優だ。明後日からまた新富町よ。出揃つ
たら見に来給え。いいかい。楽屋口へ廻つて、玉水を呼んで
くれつていいたまえ。」

「玉水……?」

「うむ、玉水三郎……。」「いいながら急しなく懐中から女
持の紙入を探り出して、小さな名刺を見せ、「ね、玉水三郎。
昔の吉さんじゃないぜ。ちゃんともう番附に出ているんだぜ。」
「面白いだろうね。役者になつたら。」

「面白かったり、辛かったり……しかし女にやア不自由しねえよ

。「吉さんはちよつと長吉の顔を見て、「長さん、君は遊ぶのかい。」

長吉は「まだ」と答えるのがその瞬間男の恥であるような気がして黙った。

「江戸一の梶田楼かじたらうツていう家うちを知つてるかい。今夜一緒にお出でな。心配しないでもいいんだよ。のろけるんじゃないが、心配しないでもいいわけがあるんだから。お安くないだろう。ははははは。」と吉さんは他愛もなく笑った。長吉は突然に、

「芸者は高いんだらうね。」

「長さん、君は芸者が好きなのか、贅ぜいたく沢だ。」と新俳優の吉さんは意外らしく長吉の顔を見返したが、「知れたもんさ。しかし

金で女を買うなんざア、ちツとお人が好過ひとよすぎらア。僕ア公園で二、三軒待合まちあいを知つてるよ。連れてツてやろう。万事方寸ばんじほうすんうちの中うちにありさ。」

さつき

先刻から三人四人と絶えず上つて来る見物人で、大向おおむこうはかな

ざつとう

り雑沓して来た。前の幕から居残つている連中れんじゆうには待ちく

なら

たびれて手を鳴すものもある。舞台の奥から拍子木の音が長い間ま

を置きながら、それでも次第に近く聞えて来る。長吉は窮屈に腰をかけた明り取りの窓から立上る。すると吉さんは、

ひとりごと

「まだ、なかなかだ。」と独言ひとりごとのようにいつて、「長さん。

どうぐだて

あれア廻りの拍子木といつて道具立どうぐだての出来上ツたつて事を、役者の部屋の方へ知らせる合図なんだ。開あくまでにやアまだ、なか

なかよ。」

悠然として巻煙草まきたばこを吸い初める。長吉は「そうか」と感服したらしく返事をしながら、しかし立上ったままに立見の鉄格子から舞台の方を眺めた。花道から平土間ひらどまの榭ますの間をば吉さんの如く廻りの拍子木の何たるかを知らない見物人が、すぐにも幕があくのかと思つて、出歩いていた外そとから各自の席に戻ろうと右方左方へと混雑している。横手の棧敷裏さじきうらから斜ななめに引幕ひきまくの一方にさし込む夕陽ゆうひの光が、その進み入る道筋だけ、空中に漂ただよう塵と煙草の煙をばありありと眼に見せる。長吉はこの夕陽の光をば何という事なく悲しく感じながら、折おりおり々吹込む外の風が大きな波を打うたせる引幕の上を眺めた。引幕には市川いちかわ〇〇丈じょうへ、浅草公園芸げいぎれ妓ぎ

連中んじゆうとして幾人いくたりとなく書連かきつらねた芸者の名が読よまれた。暫しばらくして、

「吉さん、君、あの中で知つてる芸者があるかい。」

「たのむよ。公園は乃公おいらたちの繩張なわばり中うちだぜ。」吉さんは一種の屈辱を感じたのであろう、嘘うそか誠か、幕の上にかいてある芸者の一人々々の経歴、容貌、性質を限りもなく説明しはじめた。

拍子木がチヨンチヨンと二ツ鳴った。幕開まくあきの唄うたと三味線が聞え引かれた幕が次第こまに細かく早める拍子木の律りつにつれて片寄せられて行く。大向おおむこうから早くも役者の名をよぶ掛け声。たいくつした見物人の話声いちじが一時やに止んで、場内は夜の明けたような一種の明るさと一種の活気かっきを添えた。

八

お豊はとよ今戸橋いまとぼしまで歩いて来て時節じせつは今正いままに爛漫らんまんたる春の四月
 である事を始めて知った。手一ツの女世帯おんなじよたいに追われている身
 は空が青く晴れて日が窓さしこに射込み、斜向すじむこうの「宮戸川みやとがわ」とい
 う鰻屋うなぎやの門口かどぐちの柳が緑色の芽をふくのによつと時候の変遷を
 知るばかり。いつも両側の汚れた瓦屋根かわらやねに四方あたりの眺望ささえぞを遮られ
 た地面の低い場末よこちようの横町よこまちから、今突然、橋の上に出て見た四
 月の隅田川すみだがわは、一年に二、三度と数えるほどしか外出そとでする事
 ない母親お豊の老眼をば信じられぬほどに驚かしたのである。晴

れ渡つた空の下に、流れる水の輝き、堤の青草、その上につづく
 桜の花、種々の旗が閃く大学の艇庫、その辺から起る人々の叫
 び声、鉄砲の響き。渡船から上下りする花見の人の混雑。あ
 たり一面の光景は疲れた母親の眼には余りに色彩が強烈すぎるほ
 どであった。お豊は渡場の方へ下りかけたけれど、急に恐るる
 如く踵を返して、金竜山下の日蔭になつた瓦町を急いだ。
 そして通りがかりのなるべく汚い車、なるべく意気地のなさそう
 な車夫を見付けて恐る恐る、

「車屋さん、小梅まで安くやつて下さいな。」といった。

お豊は花見どころの騒ぎではない。もうどうしていいのかわら
 ない。望みをかけた一人息子の長吉は試験に落第してしまつたば

かりか、もう学校へは行きたくない、学問はいやだといひ出した。お豊は途法とほうに暮れた結果、兄の蘿月らげつに相談して見るより外ほかに仕様がな
がないと思つたのである。

三度目に掛合かけあつた老車夫が、やつとの事でお豊の望む賃銀で小梅行きを承知した。吾妻橋あずまばしは午後あすまはしの日光と塵埃じんあいの中におびただしい人出ひとでである。着飾ひとでつた若い花見の男女を載せて勢いきおいよく走る車あいだの間をば、お豊を載せた老車夫は梶かじを振りながらよたよた歩いて橋を渡るや否なや桜花にぎわの賑よそいを外すに、直ぐなかと中ごうの郷こけらへ曲ぶつて業なりひ平橋らばしへ出ると、この辺はもう春といつても汚こけらい鱗うらら 葺ふの屋根ほりわの上に唯ただ明あかるく日があたつていふばかりで、沈滞ひきふねどおした堀ほりわ割りの水が麗うららかな青空の色をそのままに映ひしている曳舟ひきふねどお通り。昔は

金瓶楼きんべいろうの小太夫こだゆうといわれた蘿月の恋女房は、綿衣ぬのこの襟元えりもとに手拭ぬぐいをかけ白粉焼おしろいやけのした皺しわの多い顔に一ぱいの日を受けて、子供の群むれがめんこや独楽こまの遊びあそびをしている外ほかには至いたつて人通りの少すくい道端みちばたの格子戸先こうしどさきで、張板はりいたに張物はりものをしていた。駈かけて来て止る車と、それから下りるお豊の姿を見て、

「まあお珍しいじやありませんか。ちよいと今戸いまどの御師匠おししょうさんですよ。」と開あけたままの格子戸こうしから家うちの内なかへと知らせる。内なかには主人あるじの宗匠そうしょうが万年青おもとの鉢はちを並べた縁先えんさきへ小机ここしきを据え頻しきりに天地人てんちじんの順序しゆじゆをつける俳諧はいかいの選せんに急いそがしい処ところであつた。

掛けている眼鏡めがねをはずして、蘿月は机こしきを離れて座敷ざしきの真中まんなかに坐り直すわつたが、襷たすきをとりながら這入はいつて来る妻つまのお滝たきと来訪らいぼうのお

豊、同じ年頃としごろの老いた女同士は幾度いくたびとなくお辞儀の讓合ゆずりあいをしては長々しく挨拶あいさつした。そしてその挨拶の中に、「長ちやんも御丈夫ですか。」「はア、しかし彼あれにも困りきりません。」というような問答もんどうから、用件は案外に早く蘿月しずかの前に提出される事になったのである。蘿月しずかは静しずかに煙草たばこの吸殻すいがらをはたいて、誰にかぎらず若い中うちはとかくに気の迷うことがある。気の迷っている時には、自分にも覚えがあるが、親の意見も仇あだとしか聞えない。他はたから余り厳しく干渉するよりはかえって気まかせにして置く方が薬くすりになりはしまいかと論じた。しかし目に見えない将来の恐怖ばかりに満みされた女親の狭い胸にはかかる通人つうじんの放任主義は到底容いれられべきものでない。お豊は長吉が久しい以前からしばし

ば学校を休むために自分の認みとめ印いんを盗んで届とど書けしを偽造して
いた事をば、暗黒な運命の前兆である如く、声まで潜ひそめて長々し
く物語る……

「学校がいやなら如何どうするつもりだと聞いたら、まアどうでしょ
う、役者になるんだツていうんですよ。役者に。まア、どうでし
よう。兄さん。私やそんなに長吉の根性が腐つちまツたのかと思
つたら、もう実に口惜くやしくツてならないんですよ。」

「へーえ、役者になりたい。」訝いぶかる間まもなく蘿月は七ツ八ツの頃
によく三味線を弄物おもちゃにした長吉の生立おいたちを回想した。「当人が
たつてと望むなら仕方のない話だが……困つたものだ。」

お豊は自分の身こそ一家の不幸のために遊芸の師匠に零落れいらくし

たけれど、わが子までもそんな賤しいものにしては先祖の位牌いはいに
 対して申もうしわけ 訳わけがないと述べる。蘿月らげつは一家の破産滅亡の昔をい
 い出されると勘かんどう 当とうまでされた放蕩ほうとうざんまい 三昧さんまいの身は、何なんにつけ、
 はげあたま 禿かぶ 頭あたまをかきたいような当惑とうかくを感じる。もともと芸人社会は大だ
 いいすすきき 好このな趣味性しゆせいから、お豊とよの偏へん 屈くつな思想しゆしゆをば攻撃こうげきしたいと心では
 思うもののそんな事ことからまたしても長ながたらしく「先祖せんぞの位牌いはい」を
 論ろんじ出だされては堪たまらないと危あやぶむので、宗そう 匠しやうは先まずその場ばを円えん
 滑んかつに、お豊とよを安心あんしんさせるようにと話をまとめかけた。

「とにかく一応いちおうは私わしが意見いけんしますよ、若い中うちは迷まようだけにかえつ
 て始末しまつのいいものさ。今夜こんやにでも明日あしたにでも長吉ながきちに遊あそびに来きるよ
 うにいつて置きなさい。私わしがきつと改心かいしんさして見みせるから、まア

そんなに心配しないがいいよ。なに世の中は案じるより産むが安いさ。」

お豊は何分よろしくと頼んでお滝が引止めるのを辞退してその家を出た。春の夕陽は赤々と吾妻橋の向うに傾いて、花見帰りの混雑を一層引立てて見せる。その中にお豊は殊更元気よく歩いて行く金ボタンの学生を見ると、それが果して大学校の生徒であるか否かは分らぬながら、我児もあのような立派な学生に仕立たいばかりに、幾年間女の身一人みひとつで生活と戦つて来たが、今は生命のちに等しい希望の光も全く消えてしまったのかと思うと実に堪えられぬ悲愁に襲われる。兄の蘿月に依頼しては見たもののやつぱり安心が出来ない。なにも昔の道楽者だからという訳ではない。

長吉に志を立てさせるのは到底人間業では及ぬ事、神仏の

力に頼らねばならぬと思ひ出した。お豊は乗つて来た車から急に

かみなりもん

雷門で下りた。

なかみせ

仲店の雑沓をも今では少しも恐れずに観

音堂へと急いで、祈願を凝した後に、お神籤を引いて見た。古び

た紙片かみきれに木版摺もくはんずりで、

お豊は大吉だいきちという文字を見て安心はしたものの、大吉はかえ

きよう

つて凶に返りやすい事を思ひ出して、またもや自分からさまざま

な恐怖を造出しつつ、非常に疲れて家へ帰った。

九

ひるすぎ
 午後から亀井戸の竜眼寺の書院で俳諧の運座があるとい
 うので、蘿月はその日の午前を訪ねて来た長吉と茶漬をすまし
 た後、小梅の住居から押上の堀割を柳島の方へと連れだ
 して話しながら歩いた。堀割は丁度真昼の引汐で真黒な汚な
 い泥土の底を見せている上に、四月の暖い日光に照付けられて、
 溝泥の臭気を盛に発散している。何処からともなく煤烟の煤
 が飛んで来て、何処という事なしに製造場の機械の音が聞える。
 道端の人家は道よりも一段低い地面に建てられてあるので、春
 の日の光を外に女房共がせつせと内職している薄暗い家内のさま
 が、通りながらにすっかりと見透される。そういう小家の曲り角
 の汚れた板目には売薬と易占の広告に交つて至る処女工募集の

吉大二十六第

災さい 轉かん 時じ 々じ 退しりぞく

わざはひもおひくしにしりぞき運うひぢくとのことなり

名な 顯あらわ 四し 方ほう 揚あがる

名のほまれおひく天下てんかにかくれなしとの事なり

改か 故こ 重じゆう 乘じゆう 禄ろく

ふるまきあらためてかさねてよくにじようすふるまきは改りてみたしび禄をうるなり

昇か 高かう 福ふく 自じ 昌かう

たかきへのぼつてふくおのすからまかえんりつしん出世してみつきはんじやうするていなり

ぐわんもうかなう 叶かな べし 〇病人本びと ぶくす 〇うせもの出る 〇まち人びと きたる 〇屋や づくりわたましさはりなし 〇たびだちよし 〇よめとりむことりげんぶく人をかへるよるす 万よろず よし

貼紙はりがみが目についた。しかし間もなくこの陰鬱いんうつな往来おうらいは迂曲うねりながらに少しく爪先つまさき上りになつて行くかと思つと、片側に赤く塗つた妙見寺みょうけんじの塀へいと、それに対して心持よく洗いざらした料理屋橋はしもと本の板塀いたべいのために突然面目を一変させた。貧しい本所ほんじよの一区が此処ここに尽きて板橋のかかつた川向うには野草のぐさに蔽おほわれた土手を越して、亀井戸村かめいどむらの畠はたと木立こだちとが美しい田園の春景色をひろげて見せた。蘿月らげつは踏み止とどまつて、
 「私わしの行くお寺はすぐ向うの川端かわばたさ、松の木のそばに屋根が見えるだろう。」
 「じゃ、伯父さん。ここで失礼しましょう。」長吉は早くも帽子を取る。

「いそぐんじやない。咽喉のどが乾いたから、まア長吉、ちよつと休んで行こうよ。」

赤く塗った板塀に沿うて、妙見寺の門前に葎よしず箆を張った休茶やすみぢ屋やへと、蘿月らげつは先に腰おろを下した。一直線の堀割はここも同じように引汐ひしほの汚い水底みなそこを見せていたが、遠くの畠はたけの方から吹いて来る風はいかにも爽さわやかで、天神様の鳥居とりいが見える向うの堤つとみの上には柳やなぎの若芽わかめが美しく閃ひらめいているし、すぐ後うしろの寺の門の屋根やねには雀すずめと燕つばめが絶え間なく囀さえずっているので、其処そこ此処ここに製造場の烟けむ出しが幾本も立っているにかかわらず、市街まちからは遠い春の午ひる後すぎの長のち閉どけさは充分じゅうぶんに心持こころもちよく味あじわれた。蘿月らげつは暫しばくあたりを眺ながめた後、それとなく長吉ながきちの顔をのぞくようにして、

「さっきの話は承知してくれたらうな。」

長吉は丁度茶を飲みかけた処なので、領付うなずいたまま、口に出して返事はしなかった。

「とにかくもう一年辛抱しんぼうしなさい。今の学校さえ卒業しちまえば……母親おふくろだつて段々取る年だ、そう頑固ばかりもいやアしまいから。」

長吉は唯ただ首を領付かせて、何処どこと当あてもなしに遠くを眺めていた。引汐の堀割つなに繋つないだ土船つちぶねからは人足にんそくが二、三人して堤の向うの製造場しきりへと頻しきりに土を運んでいる。人通りといつては一人もこなたない此方の岸こなたをば、意外にも突然二台の人力車じんりきしやが天神橋あまのきりしやの方から駈かけて来て、二人の休んでいる寺の門前もんぜんで止つた。大方おおかた墓かた

参りに来たのであろう。町家の内儀らしい丸鬚の女が七、八ツになる娘の手を引いて門の内へ這入つて行つた。

長吉は蘿月の伯父と橋の上で別れた。別れる時に蘿月は再び心配そうに、

「じゃ……。 」といつて暫く黙つた後、「いやだろうけれど当分辛抱しなさい。親孝行して置けば悪い報はないよ。」

長吉は帽子を取つて軽く礼をしたがそのまま、駈けるように早はや足あしに元来もとた押上おしあげの方へ歩いて行つた。同時に蘿月の姿は雑草の若芽わおに蔽おほわれた川向うの土手の陰にかくれた。蘿月は六十に近いこの年きまで今日きょうほど困こつた事、辛つらい感情かんじに迫せめられた事はないと思つたのである。妹お豊とよのたのみも無理ではない。同時に長吉

が芝居道へ這入ろうという希望もまたわるいとは思われない。一寸の虫にも五分の魂で、人にはそれぞれの氣質がある。よかれあしかれ、物事を無理に強いるのはよくないと思つていたので、蘿月は両方から板ばさみになるばかりで、いずれにとも賛同する事ができないのだ。殊に自分が過去の経歴を回想すれば、蘿月は長吉の心の中は問はずとも底の底まで明かに推察される。若い頃の自分には親代々の薄暗い質屋の店先に坐つて麗かな春の日を外に働きくらすのが、いかに辛ういかに情なかつたであろう。陰気な燈火の下で大福帳へ出入の金高を書き入れるよりも、川添いの明い二階家で洒落本を読む方がいかに面白かつたであろう。長吉は髻を生した堅苦しい勤め人などになるよりも、自分

の好きな遊芸で世を渡りたいという。それも一生、これも一生である。しかし蘿月は今よんどころなく意見役の地位に立つ限り、そこまでに自己の感想を暴露ばくろしてしまうわけには行かないので、その母親に対したと同じような、その場かぎりの気安めをいって置くより仕様がなかった。

長吉は何処いずこも同じような貧しい本所ほんじよの街から街をばててく歩いた。近道を取って一直線に今戸いまどの家へ帰ろうと思ふのでもない。何処どこへか廻り道して遊んで帰ろうと考えるのでもない。長吉は全く絶望してしまった。長吉は役者になりたい自分の主意を通すには、同情の深い小梅こうめの伯父さんに頼るより外ほかに道がない。伯

父さんはきつと自分を助けてくれるに違いないと予期していたが、その希望は全く自分を欺いた。あざむ伯父は母親のように正面から烈しはげく反対を称えはしなかつたけれど、聞いて極楽見て地獄の譬を引たとえき、劇道げきどうの成功の困難、舞台の生活の苦痛、芸人社会の交際の煩瑣はんさな事などを長々と語つた後、母親の心をも推察してやるようにと、伯父の忠告を待たずともよく解わかっている事を述べつづけたのであつた。長吉は人間というものは年を取ると、若い時分に経験した若いものしか知らない煩悶はんもん不安をばけろりと忘れてしまつて、次の時代に生れて来る若いものの身の上を極めて無頓着むとんちゃくに訓戒批評する事のできる便利な性質を持つているものだ、年を取つたものと若いものとの間には到底一致されない懸隔けんかくのある事

をつくづく感じた。

何処どこまで歩いて行つても道は狭くて土が黒く湿つていて、大方は路地ろじのように行き止りかと危あやぶまれるほど曲つている。苔こけの生えた鱗こけらぶ茸ぶきの屋根、腐つた土台、傾いた柱、汚れた板目はめ、干してある檻ぼろ褌おしめや襦おしめ袢おしめや、並べてある駄菓子や荒物あらものなど、陰鬱いんうつな小家こいえは不規則に限りもなく引きつづいて、その間に時々驚くほど大きな門もん構がまえの見えるのは尽ことごとく製造場であつた。瓦屋根かわらの高く聳そびえているのは古寺ふるでらであつた。古寺は大概荒れ果てて、破れた塀かから裏手の乱塔場らんとうばがすつかり見える。束たばになつて倒れた卒塔婆そとばと共に青苔あおこけの斑点しみに蔽おおわれた墓石はかいしは、岸くずという限界くずさえ崩くずれてしまつた水溜りみずたまのような古池の中へ、幾個いくつとなくのめり込んで

いる。無論新しい手向たむけの花などは一つも見えない。古池には早くひるなかも昼中に蛙かわずの声が聞えて、去年のままなる枯草は水にひたされて腐くさっている。

長吉はふと近所の家の表札なかのに中郷竹町ごうたけちようと書いた町の名を

読んだ。そして直様すぐさま、この頃ごろに愛読した為ため永春水ながしゆんすいの『梅うめご

暦よみ』を思出した。ああ、薄命なあの恋人たちはこんな気味のわ

るい湿地しつちの街に住んでいたのか。見れば物語の挿絵さしえに似た竹垣の

家もある。垣根の竹は枯れきってその根元は虫に喰われて押せば

倒れそうに思われる。潜門くぐりもんの板屋根には瘦やせた柳からが辛くも若

芽の緑をつけた枝を垂たらしている。冬の昼過ぎひそ窃かに米よねはち八が病氣

の丹次郎たんじろうをおとずれたのもかかる佗住居わびずまいの戸口とぐちであつたらう。

半次郎はんじろうが雨あめの夜よの怪談かいだんに始めてお糸いとの手を取ったのもやはりかかる家いとまの間であつたらう。長吉ちやきちは何ともいえぬ恍惚こうこつと悲哀ひがいとを感じた。あの甘くして柔かく、忽たちまちにして冷淡れんたんな無頓着むとんちやくな運命うんめいの手に弄もてあそばれたい、という止やみがたい空想くうさうに駆かられた。空想くうさうの翼よくのひろがるだけ、春はるの青空あおぞらが以前いぜんよりも青く広く目に映うつじる。遠とほくの方かたから飴あめ売うりの朝あさ鮮せん笛ふえが響ひびき出した。笛ふえの音ねは思おもいがけない処ところで、妙ふしな節ふしをつけて音調おんてうを低ひめるのが、言葉ことばにいえない幽愁もよおを催もよおさせる。

長吉ちやきちは今いままで胸むねに蟠わだかまつた伯父おじに対する不し満まんを暫しばらく忘わすれた。現げん実じつの苦悶くもんを暫しばらく忘わすれた……。

十

氣候が夏の末から秋に移つて行く時と同じよう、春の末から夏の始めにかけては、折々おりおり おおあめ大雨が降つづく。千束町せんぞくまちから吉よしわ原田圃らたんぼは珍しくもなく例年の通りに水が出た。本所ほんじよも同じように所々しよしよに出水しゆつすいしたそうらげつで、蘿月らげつはお豊とよの住む今戸いまとの近辺きんべんはどうであつたかと、二、三日過ぎてから、所用の歸りの夕方に見舞に来て見ると、出水でみずの方は無事であつた代りに、それよりも、もつと意外な災難にびつくりしてしまつた。甥おいの長吉が釣つりだい台だいで、今しも本所の避病院ひびやういんに送られようという騒さわぎの最さいちゆう中である。母親のお豊は長吉が初はつあわせ袷あわせの薄着をしたまま、千束町

近辺の出水の混雑を見にと夕方から夜おそくまで、泥水の中を歩き廻ったために、その夜よから風邪をひいてたちま腸窒扶斯ちようチフスになつたのだという医者いしやの説明をそのまま語つて、泣きながら釣台あつとの後にいやおついて行つた。途法とほうにくれた蘿月らげつはお豊おとよの歸つて来るまで、う忸なく留守番うちにと家の中に取り残されてしまつた。

家の中は区役所の出張員いおうが硫黄いおうの煙せきたんさんと石炭酸せきたんさんで消毒あとした後、まるで煤掃すすはきか引越しの時のような狼藉ろうぜきに、丁度ひとけ人氣ひとけのない寂しさを加えて、葬式かんおけの棺桶おくりだを送出した後と同じような心持である。世間はばかを憚おそるようおそにまだ日の暮れぬ先から雨戸あめどを閉めた戸外おもてには、夜と共に突然強い風が吹き出したと見えて、家いえじゆう中の雨戸あめどががたがた鳴り出した。気候はいやに肌寒あせくなつて、折々勝手

口の破障子やぶれしやうじから座敷の中まで吹き込んで来る風が、薄暗い釣つるしランプの火をば吹き消しそうに揺ると、その度々たびたび、黒い油煙ゆえんがホヤを曇らして、乱雑に置き直された家具の影が、汚れた畳と腰こ張しばりのはがれた壁の上に動く。何処どこか近くの家で、百万遍ひやくまんべんの念仏を称え始める声が、ふと物哀れに耳についた。蘿月たつは唯た一人ひとりで所在しよざいがない。退屈たいくつでもある。薄淋うすさびしい心持もする。こういう時には酒がなくてはならぬと思つて、台所を探し廻つたが、女おんな世帯せたいの事とて酒盃さかずき一ツ見当らない。表の窓際まどぎわまで立戻つて雨戸の一枚を少しばかり引き開けて往来を眺めたけれど、向むこう側がわの軒燈けんとうには酒屋らしい記号しるしのものは一ツも見えず、場末の街は宵ながらにもう大方おおかたは戸を閉めていて、陰気な百万遍ひやくまんべんの声

がかえつてはつきり聞えるばかり。河の方から烈しく吹きつける風が屋根の上の電線をヒューヒュー鳴すのと、星の光の冴えて見えるのとで、風のある夜は突然冬が来たような寒い心持をさせた。蘿月は仕方なしに雨戸を閉めて、再びぼんやり釣ランプの下に坐つて、続けざまに煙草を喫んでは柱時計の針の動くのを眺めた。時々鼠が恐しい響をたてて天井裏を走る。ふと蘿月は何かその辺に読む本でもないかと思いついて、筆筒の上や押入の中を彼方此方と覗いて見たが、書物といつては常磐津の稽古本に綴るの古いもの位しか見当らないので、とうとう釣ランプを片手にさげて、長吉の部屋になつた二階まで上つて行つた。

机の上に書物は幾冊も重ねてある。杉板の本箱も置かれてある。

蘿月は紙入かみいれの中にはさんだ老眼鏡を懐中ふところから取り出して、先まず洋装の教科書をば物珍しく一冊々々ひろげて見ていたが、する中うちにばたりと畳の上に落ちたものがあるので、何かと取上げて見ると春着の芸者姿をしたお糸の写真であつた。そつと旧もとのよう
に書物の間に収めて、なおもその辺の一冊々々を何心もなく漁あさつて行くと、今度は思いがけない一通の手紙ゆきあたに行当あたつた。手紙は書き終らずに止めやめたものらしく、引き裂さいた巻紙まきがみと共に文句は杜と切ぎれていたけれど、読み得るだけの文字で十分に全体の意味を解する事ができる。長吉は一ひとたび度別わかれたお糸とは互たがいに異なるその境遇から日一日とその心までが遠とおざかつて行つて、折角おきななじみの幼馴染おきななじみも遂にはあかの他人に等しいものになるであらう。よし時々手紙

の取りやりはして見ても感情の一致して行かない是非^{ぜひ}なさを、こまごまと恨んでいる。それにつけて、役者か芸人になりたいたいと思^{おも}い^いさ^さだ^だ定^{じやう}めたが、その望みも遂^{つひ}に遂^とげられず、空しく床屋^{とこや}の吉^{きち}さんの幸福^{うらや}を羨みながら、毎日ぼんやりと目的のない時間を送つてい^いるつまらなさ、今は自殺する勇氣もないから病氣にでもなつて死ねばよいと書いてある。

蘿月は何というわけもなく、長吉が出水^{でみず}の中を歩いて病氣になつたのは故意^{こい}にした事であつて、全快する望^{のぞみ}はもう絶え果ててい^いるような実に果敢^{はか}ない感^{かんじ}に打たれた。自分は何故^{なぜ}あの時あのような心にもない意見をして長吉の望^{のぞみ}みを妨^{さまた}げたのかと後悔の念に迫^せめられた。蘿月はもう一度思うともなく、女に迷つて親の家を追

出された若い時分の事を回想した。そして自分はどうしても長吉の味方にならねばならぬ。長吉を役者にしてお糸と添わしてやらねば、親代々の家うちを潰つぶしてこれまでに浮世の苦勞をしたかいがない。通人つうじんを以て自任じにんする松風庵蘿月宗匠しょうふうあんらげつそうしょうの名はじに愧はじると思つた。

鼠がまた突だしぬけ如ごとに天井裏を走る。風はまだ吹き止まない。釣つるしラらンの火は絶えず動揺ゆらめく。蘿月は色の白い眼のぱっちりした面おもな長ながの長吉と、円顔の口元に愛あいきよう嬌けうのある眼尻の上ったお糸との、若い美しい二人の姿をば、人情本の作者が口絵の意匠でも考えるように、幾いくたび度か並べて心の中うちに描きだした。そして、どんな熱病に取付かれてもきつと死んでくれるな。長吉、安心しろ。

乃^{おれ}公がついているんだぞと心に叫んだ。

明治四十二年八月—十月作

第五版すみだ川之序

小説『すみだ川』を草そくしたのはもう四年ほど前の事である。外国から帰つて来たその当座一、二年の間はなおかの国の習慣が抜けないために、毎日の午後といえは必ず愛読の書をふところにして散歩に出掛けるのを常とした。しかしわが生れたる東京の市街は既に詩をよろこぶ遊民の散歩場さんぽじょうではなくて行く処ところとしてこれ戦乱後新興の時代の修羅場しゆらじょうたらざるはない。その中なかにもなおわずかにわが曲りし杖つえを留とどめ、疲れたる歩みを休めさせた処はやはりいにしへの唄うたに残のこつた隅田川すみだがわの兩岸であつた。隅田川はその当

時目まのあたり眺める破損の実景と共に、子供の折に見覚えた臙おぼろなる過去の景色の再来と、子供の折から聞き伝きつたえていたさまざまの伝説の美とを合せて、いい知れぬ音楽の中に自分を投込んだのである。既に全く廃滅に帰せんとしている昔の名所の名残ほど自分の情緒に対して一致調和を示すものはない。自分はわが目に映じたる荒廢の風景とわが心を傷いたむる感激の情とを把とつてここに何物かを創作せんと企てた。これが小説『すみだ川』である。さればこの小説一篇は隅田川という荒廢の風景が作者の視覚を動うごかしたる象形的幻想を主として構成せられた写實的外面の芸術であると共にまたこの一篇は絶えず荒廢の美を追究せんとする作者の止やみがたき主觀的傾向が、隅田川なる風景によってその抒情詩的本能

を外発さすべき象徴を搜めた理想的内面の芸術ともいい得よう。さればこの小説中に現わされた幾多の叙景は篇中の人物と同じく、否時としては人物より以上に重要な分子として取扱われている。それと共に篇中の人物は実在のモデルによつて活ける人間を描写したのではなくて、丁度アンリイ、ド、レニエエがかの『賢き一青年の休暇』に現したる人物と斉しく、隅田川の風景によつて偶然にもわが記憶の中に蘇り来つた遠い過去の人物の正に消え失せんとするその面影を捉えたに過ぎない。作者はその少年時代によく見馴れたこれら人物に対していかなる愛情と懐しさとを持つてゐるかは言うを俟たぬ。今年花また開くの好時節に際し都下の或新聞紙は上の桜樹漸く枯死するもの多きを説

く。ああ新しき時代は遂に全く破壊の事業を完成し得たのである。さらばやがてはまた幾年の後に及んで、いそがしき世は製造所のえんとうむらだ煙筒叢立つ都市の一隅に当つてかつてはほととぎす時鳥鳴き蘆の葉さしらうおひらめさやき白魚閃き桜花雪と散りたる美しき流のながれあつた事をも忘れ果ててしまふ時、せめてはわが小さきこの著作をして、傷ましき時代が産みたるはつこ薄倅の詩人がいにしえの名所をとむら吊う最後の中の最後の声たらしめよ。

大正二みずのとうし癸丑の年春三月小説『すみだ川』さいわい幸に第五版を發行すると聞きて

荷風小史

すみだ川序

わたくしの友人佐藤春夫君を介して小山書店の主人はわたくしの旧著『すみだ川』の限定単行本を上梓したいことを告げられた。今日の出版界はむしろ新刊図書の過多なるに苦しんでいる。わたくしは今更二十四、五年前の拙作小説を復刻する必要があるや否やを知らない。しかしわたくしは小山書店の主人がわたくしの如き老朽文士の旧作を忘れずに記憶しておられたその好意については深く感謝しなければならぬ。依てその勧められるがままに旧版を校訂し併せて執筆当初の事情と旧版の種類とをここに識

すことにした。

わたくしが初はじめて小説『すみだ川』に筆をつけたのは西洋から帰つて丁度満一年を過すこした時である。即ち明治四十二年の秋八月のはじめに稿を起おこし十月の末に書き終るが否や亡友井上唾唾君に校閱を乞い添てんさん刪をなした後のち草稿を雑誌『新小説』編輯者へんしゅうしゃの許もとに送つた。当時『新小説』の編輯主任は後藤宙外氏であつたかあるいは鈴木三重吉氏であつたか明あきらかに記憶していない。わたくしの草稿はその年十二月発行の『新小説』第十四年第十二巻のはじめに載せられた。わたくしはその時馬齒ばし三十二歳であつた。本書に掲載した当時の『新小説』「すみだ川」の口絵は斎藤昌三氏の所蔵本を借りて写真版となしたものである。ここに斎藤氏の好

意を謝す。

小説『すみだ川』に描写せられた人物及び市街の光景は明治三十五、六年の時代である。新橋上野浅草の間を往復して

た鉄道馬車がそのまま電車に変わったころである。わたくしは丁度その頃に東京を去り六年ぶりに帰ってきた。東京市中の街路は到る処旧觀を失っていた。以前木造であつた永代と両国との

二橋は鉄のつり橋にかえられたのみならず橋の位置も変りまたその兩岸の街路も著しく変つていた。明治四十一、二年のころ隅

田川がわに架せられた橋きょう梁きょうの中でむかしのままに木づくりの姿

をとどめたものは新大橋しんおおはしと千住せんじゆの大橋ばかりであつた。わた

くしは洋行以前二十四、五歳の頃に見歩いた東京の町々とその時

代の生活とを言知れずなつかしく思返して、この心持を表すために一篇の小説をつくろうと思立った。この事はつぶさに旧版『すみだ川』第五版の序に述べてある。

旧版発行の次第は左の如くである。

明治四十四年三月^{もみやま} 山書店は『すみだ川』の外にその頃わたくしが『三田^{みた}文学』に掲げた数篇の短篇小説及戯曲^{および}を集め一卷となして刊行した。当時^{きじ} 山書店は祝^{いわい}橋^{ばしむこう}向^{こう}の河岸^{かしどおり}通から築地の電車通へ出ようと^{しずか}する^{よこちよう} 横^{よこちよう} 町の南側（築地二丁目十五番地）にあつて専ら^{もつぱ}俳諧^{はいかい}の書巻を刊行していたのであるが拙著『すみだ川』の出版を手初めに以後六、七年の間盛^{さかん}に小説及び文芸の書類を刊行した。書店の主人みずからもまた短篇小説集『遅

日』を著した。谷崎君の名著『刺青』が始めて単行本となつて世に公にせられたのも靱山書店からであつた。森鷗外先生が『スバル』その他の雑誌に寄せられた名著の大半もまた靱山書店から刊行せられた。

大正五年四月靱山書店は旧版『すみだ川』を改刻しこれを縮刷本『荷風叢書』の第五巻となし装帧の意匠を橋口五葉氏に依頼した。

大正九年五月春陽堂が『荷風全集』第四巻を編輯刊行する時『すみだ川』を巻頭に掲げた。この際わたくしは旧著の辞句を訂正した。

大正十年三月春陽堂が拙作小説『歡樂』を巻首に置きこれを

表題にして単行本を出した時再び『すみだ川』をその中に加えた。昭和二年九月改造社が『現代日本文学全集』を編輯した時その第二十二編の中に『すみだ川』を採録した。

昭和二年七月春陽堂の編輯した『明治大正文学全集』第三十一編にも『すみだ川』が載せられている。

昭和三年二月木村富子女史が拙著『すみだ川』を潤色して

戯曲となしこれを本郷座の舞台上に上した。その時重なる人物に

扮した俳優は 市川寿美蔵 市川松 蔦 大谷友右衛門 市川

紅若その他である。木村女史の戯曲『すみだ川』はその著『銀

扇集』に収められている。

昭和十年十月麻布の廬において

荷風
散さん人じん識しるす

青空文庫情報

底本：「すみだ川・新橋夜話 他一篇」岩波文庫、岩波書店

1987（昭和62）年9月16日第1刷発行

2005（平成17）年11月25日第23刷発行

底本の親本：「荷風小説 三」岩波書店

1986（昭和61）年7月発行

入力：門田裕志

校正：阿部哲也

2009年12月20日作成

2010年11月1日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

すみだ川

永井荷風

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>